青鞜

十二月號

明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）明治四十四年十二月一日發行第一卷第四號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜

四十四年十二月一日

第一巻　第四號

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第四號内容

わが家（短歌）……一……與謝野晶子
夜汽車（小説）……三……尾島菊子
蛇影（小説）……一三……永安初子
痛みと藝術と（感想）……三一……上野葉子
寂しみ（詩）……四六……小林歌津子
高原の秋（つゞき）……四九……らいてう
一夜（小説）……六五……物集和子
俳句……七七……白雨
黒猫……七九……ポオ
高窓の下（小説）……八三……加藤みどり
自由劇場の二夜（劇評）……一一九……長谷川時雨
編輯室より……一三一……
表紙畫……長沼智惠子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わが家

與謝野晶子

片ときもたち離れずてならひしはきのふのわが世こし方のこと

おなじ世のこととは何のはしにさへ思はれがたき日をも見るかな

おのれこそ旅ごこちすれ一人居るひるのはかなさ夜のあぢきなさ

ねがはくば君かへるまで石としてわれ眠らしめメズサの神よ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うれふるやはたよろこぶやわが君にかかはる事のいと遥かなる
おもひでの世界つくると二日三日つよき煙草をとるもはかなし
今すこし人にかへらば子等などもなだめんと思ふいとわろしかし
海こえんいざや心にあらぬ日をおくらぬ人とわれならんため
逢見ねば黄泉とも思ふ遠方へたからの君をなどやりにけん
あはれにも忍ぶ戀にはあらねども咎められじと思ふ時泣く

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夜汽車

尾島菊子

宵の口にばら／＼と夕立が降つたあと、空はまだ濃く灰色に曇つて、星がひとつふたつをり／＼雲のあひだから鈍い光を見せた。

新潟行の夜行列車は今暗を縫うて進行してゐる。歸省やら避暑やらの客で、列車は悉く滿員であつた。

前から二つ目の三等室の隅つこに、淋しさうな獨り旅の女がゐる。紺と藍のあらい棒縞のメリンスの單衣に、小波羽二重の派手な模樣の帶を締めて、髮はあつさりとした庇にしてゐる。娘にしては稍老けすぎたと云つて細君としてはあまりに粹なところがある。女は始終顏へ半巾をあてゝ、美しく化粧した頰へ石炭の燃殼の飛び込むのを恐れた。

赤羽へ來ると洋服の若い男が二人乘つた。女の隣りには二人が掛けるだけの空席があつた。初めに入つた鼠の方は順序として先へ腰を下ろした。あとから乘つた紺の男は女の隣

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

りへ掛けた。紺の男は自分と友人との間へ無理に鞄をおいた。鼠の男は偶と前に半襯衣を片肌脱いだ厭な爺と、手織縞の暑ぼつたい單衣を着た田舍臭いお神さんとの間の空席を見て、其處へ移つた。お神さんは慌てゝ席をより廣くあけて渡した。鼠の男は紺の男と同じに鞄を傍においた。そして二人相對すると、鼠の男は突と紺の手を引張つて、氣味わるく笑ひながら小聲で何やら囁いた。

「馬鹿ッ」

紺の男はニヤリとして蹴落すやうに云つた。鼠の男は皆と女の方を見て微笑の眼を外らす。女は絕えず見て見ぬ振り、聞いて聞えぬ體を裝うてゐる。男は二人とも新しい麥藁帽を冠つて、金緣の眼鏡をかけてゐる。女の方から見ると斜つかいながら鼠の男の顏は、時々女の方を見るので眞直に見られる。けれども隣りの方は横顏さへ見られなかつた。男の方でも決して女の方を向かぬ。そして友達と斜に相對してゐる。斜になればなるほど、少しづゝ女に體を凭れかけるやうにも見えた。

「失禮な男だ。」

と云つたやうに女は細い眼をあけて、男の横顏から頸のあたりをながめた。色が黑くて、眼元が女のやうに優しく美しかつた。鼻は然う高くはないが團子ではなかつた。そして眼鏡が能く似合つた。けれども何處となく暗い顏立であつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

鼠の方は眉もキッパリとして、眼も大きく鼻も相當に高くて、全體がハッキリとした明るい顔立であつた。何方が好男子かと云へば無論鼠の方である。

女は深く氣にとめるでもなく、二人を見較べた。隣りの男は汽車の動搖につれて凭れかゝらうとする。女は窓の方へ窓の方へと退けた。男は避けられると知りつゝ故意に爲るかの如く凭れようとする。そして時々怖えたやうに慌てゝ坐勢をなほした。それは前の友人に不審な擧動を感づかれはしなかつたかと、自分で偶と氣の附いた時であつた。人々はふらり／＼と坐眠りをはじめた。帽子も下る、丸髷も下る、束髪も禿頭も云ひ合はしたやうに、コクリ／＼やつてゐる。

鼠の男は鞄に凭れて、だん／＼帽子を前の方へ下げた。女の方から見ると、顔がすつかり帽子の蔭にかくれて了つた。

紺の男は右の手を鞄にかけて、左を膝の上においた。そして眠るでもなく覺めるでもなく、うつら／＼としながら、汽車の動く度に女に謎をかけるやうな嬌態を示した。女は眠つた振りを見せて眤としてゐる。窓にかけた右の手に手巾を持つて、顔を掩うてゐる。右の手は膝の上に載せてゐたが、何時の間にか下へ滑る。メリンスの輕い袂がふうわりと手の上に掛つた。

偶と男の手が滑つて落ちる。女はハッとした體で手を引く。

女の前に掛けてゐた筒袖紺がすりに、小倉の袴をつけた十六七の悧巧さうな年少の學生が、ボカリと眼をあけた。そして此方の男の擧動を寢恍けたやうな無邪氣らしい顔をして監視するかの如く見てゐる。男は堅くなつてゐた。

少年は足元の毛繻子の袋からサイダーの瓶を引き出して口を脱くと、瓶ごとぐい〳〵飮みはじめた。此方の男は氣味わるさうに左の手を又膝の上へ持つて來た。

少年は空瓶を窓の外へ捨てゝ、又眠り出した。薄暗い洋燈の光に照らされた室一杯の人々は、皆玩具のやうに右に左に前に後に搖られてゐる。人いきれて蒸されるように暑苦しい。

汽車は高崎まで急行て來ると、次第に徐々と速力を減じた。走つては停まり、走つては停まる田舍の停車場の柱時計は、何處かで淋しく零時十分を示してゐた。寂寞とした夜陰の中にレールを軋る汽車の音ばかりが殊々と響いてゐる。

後から女の腰部へ膝頭を押つける者があつた。それから肩のあたりへ火を噴くやうな熱い頭を時々コツン〳〵と當てる、女は其度に朦朧として眼をあげて振り返つて見た。十二の女の兒をつれてゐる四十計りの髭の男である。胡坐をかいてゐる膝頭が、此方の席まで喰み出してゐるのだ。

女は拙い顔をして少し宛つ前へ乘り出した。着物と着物とが觸る度に、兩方から來る男

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の熱い肉のほてりが心地わるく體に迫つた。

紺の男はハタ〳〵と扇子を使つた。窓から吹き込む煤煙の夜風に、はら〳〵と消炭のやうな粉をふりまいて、其上に女の髮をバサ〳〵にする。女は又しても半巾で額から鼻の穴を拭いた。そして人知れず帶の間から紙白粉を出して顔中を撫でた。紺の男はこれをも決して横眼で見落さなかつた。

二時すぐるころ、汽車は碓氷峠に掛つた。横川驛で停車すると、此處からはアプト式になるので、少し時間があつた。人々は慌てゝ用足しに下りた。

下りた連中が再び乘り込まうとする時に、

「大丈夫です、又停まります。」

と叫んで、汽車は靜かに進行した。一同は不安らしくきよと〳〵して、我乘る列車の扉のあとを追ふた。

汽車は少し逆行して停まつた、下りてゐた人々は見當が違つたので、蒼皇として行き迷つた。

「此處からお乘りなさい。」

崖から彼方此方の列車の扉の口へ、工夫共が板の假橋を架けた。大きな男共は小さくなつて渡つた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大蛇のやうな汽車は山と山との間をうねつて、二十幾つの峠をくゞつては出た。月は今雲間をはなれて美しくのぼつた。窓硝子を透して高く低い山の傾斜が、ぼかしたやうにぼうつと星が空に浮ぶ、溪間の清い流れが夢のやうにキラ〳〵と光つた。露深い路芝の中で可愛らしい虫の聲が聞える。

女は男の方に背を向けて外を眺めた。首筋に手をやると、其處にも石炭の粉がザラ〳〵としてゐた。懐中鏡を出して見ると、眼が甚く凹んで、顔がドス黒い。女は男に顔を見られぬやう、見られぬやうと努めた。て、だるい足を後へまげて少し横へやると、ふと靴の踵に觸れた。刹那に男の脛は輕く女の脛にもつれた。女は靜と足を引いた。

室内は咳一つする者がない。唯もう他愛もなく眠り轉けてゐる。

鼠の男は苦しさうに、

「あゝ。」

と欠伸をした。その時ちよいと眼をあけて、

「君、少し眠つたか?」

と手を伸して、對手の肩を搖つた。

「うむ、何だか落着いて眠れない、でも少しは眠つたよ。」

紺の男はさも眠りから覺めたやうに、徴に答へた。あとは又眠つて了ふ。子供を腰掛の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

上に寢かせて、自分は下に蹲踞んでゐる女が淺ましげに鼾をかいてゐる。それで丁度室内の人々に熟睡を促す催眠歌のやうに四邊に響いた。

紺の男は何時までも虛僞の眠りをつゞけてゐる。女も矢張り眠らない。

「厭！　厭!!」

女は心に叫んだ。自分ながら不安に堪へない中から、引きつけられるやうな或物に心をそゝられるので、眠りもやらず覺めもせず。

夜は白々と明け初めた。山々の姿がだん〳〵割然と見えて、綠の樹木が煙のやうに濃く霞んだ。

「もう夜が明けるのか。」

男は思ひ切つたやうに窃と女の手を探つた。上前の裙の下にあつた柔かい女の手に微に觸れると、臆病らしく窃と指先を握つた、女は顫へた。引かうとすると、一層强く五本の指を摑んだ。そして何か云ひたげにヒタ〳〵と寄り添ふた。

ガタ〳〵と屋根を踏む足音がして、室内に下つた洋燈の赤い灯が消えた。

鼠の男は眼を覺ました。紺の男は立つて女の前から體を斜に窓へ逆上せた顏を出した。

その時皆と女の顏を見たが、女は下を向いてゐた。

もうすつかり明けはなれたので、紺の男は最初のやうに整然と姿勢をとゝのへた。そし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て友人と相對した。彼方此方から欠伸がもれて、一人宛眼を覺ます。

女は髮を掻き上げて、「なでしこ」で顏を拭いて、それから外の方を向いて着物の前を合はせた。青磁色の絹縮の腰帶をギュッと締めて、それから又クリーム色のくけひもを帶の上から解いた。燃えたつやうな緋紋縮緬の帶揚も一寸ゆるめて、堅く締めると、粋なお太皷に結んで腰をかける。

棚からサイダーの瓶を下ろす。口をぬいてシュッと泡を立たせる、洋盃にあけて、ゴト〳〵と口を洗いて吐き出す。男は一目でも此方を向かれるのを待つかの如く後から眸めてゐる。

上田へ着いた。二人の男は立つた。紺の男は鞄を前に突き出しながら女の前を通つた。瞬間に伏目になつて、

「失禮いたしました。」

と、殆んど口の中で小さく云つて、嫣然と美しい別れの微笑を發した。女は礑と視線を合はして一寸恥かしそうな顏をしたが、忽ち相手を侮辱するかのやうに陰しい眼を送つた。男の微笑には感謝の意味が含まれてゐた。無聊の苦痛を忘れ暑さを忘れ、なほ且つ若い血汐を騷ぎ立たして樂しい半夜を過した假初の夢を謝したのでもあらうか?

プラットホームへ下りて威勢よく階段を昇る時、女は窓から首を出して彼の後姿を見送

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。其時女の顏には抑え切れぬ誇りの色が動いた。

日向臭い男や、油臭い女が乘つて來た。女は眉を顰めて忌はしげにそれ等の新しい乘客を蔑視した。それと同時に忽ち睡眠不足の疲勞が一時に出てポカンと口を開いたまゝ、窓に凭れてぐつすりと寢込んで了つた。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

蛇影

永安はつ子

一

ライン樹の頂らしい、蟬の聲が斷えては續き、續いては斷え、又續いた「やがて死ぬけしきも見えず秋の蟬」と古人の名句を思ひ浮べつ、律子は日當りのいゝ窓の下で今裁つたばかりの袷の袖をたゝんで居た。

フト黑い影がさした。

郵便が來た。夫宛の封書である、何の氣もなく受取つた律子は平素のやうに無斷で封を切つたが、其差出人の誰であるかは未だ彼女の問題となつて居なかつた。

あらかねの土もとけなん暑さも夢の間にて朝夕は餘程心地よき昨今思ひがけなき兄上の御出で、あまり以外さに御別れ申上げてより御話し申上ぐべき事は山程ありしを御拜顔申上げては今昔の情に堪へず唯々何事も言葉に出す能はず御察し下され度候

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とこゝ迄讀んではつと氣がついた。急いで終の名前を見る、果して其女である、律子は我と我が心を制して靜かに次を見た。

又御目にかゝる時のあるは必定には候へども餘りお名殘惜しく候故昨日は學校も早引いたし長男〇〇を伴れ三河屋に御伺ひ申候に最早御歸宅御出立後にて空しく歸途につき候事の殘念さ

定めなきが浮世とは云ひながら色々の事情ありて何事も夫へは打明けて話さぬ事に決し居候上兄は私を見捨て玉ひしかは神ならぬ身に候へども今日迄胸にたゝめる一々を御耳に入れ候はゞ笑はれもし又しかられもし又はほめられもしたりしに御話し申上ぐる時を失し候事の返す／＼も口惜しく御座候何卒御自愛の程はるかにそれのみ祈り上候

別に頼なき身、奥樣へも一度御目にかゝり御交り申上度候へども……何卒兄上よりよしなに申上おき下され度御多忙とはぞんじ候へども時にははがきにて御安否御知らせ下され度

松より

なつかしき兄上樣へ

筆も文も亂れて居る、けれども律子のためには青天の霹靂であつた。

尤も三四日前、夫がH町に行つた事だけはよく承知して居る。けれども其時松子に逅つたと云ふ事はおくびにも出さなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何も彼もさらけ出して話してしまう夫でありながら何故其事だけを秘して居るのだらう、………律子の胸は無念さに煮返る樣である。

「若し怪しい點がないとすれば平氣で語つてもいゝ筈ぢやないか」

律子の念はこの一點に集中つた。

不愉快で〳〵たまらない、自分は今迄欺されて居たのだ、夫は自分を欺いて居たのだ、それとも知らず信じて〳〵信じ貫いて全心を捧げた自分の馬鹿々々しさ、我ながら自分の姿があはれに思はれる。

もう仕事も何にもしたくない、ぼんやりと着物の縞目をみつめた美しい眼はいつの間にか曇つて居る。

二

そりや松子と云ふ女の人物は平常夫から聞及んで居た。男の樣なお轉婆で苟も已れが女であるといふ事を忘れて常に男子と往來して居たと知人は語つて居た。色の黑そうな頑丈な寫眞も見た。それて居て同窓の小學敎員と自由結婚をした事や、子供の二人もあるくせに始終夫婦喧嘩をする事、そして夫婦とも夫の小學時代からの友人であり、殊に男の方は親しい仲であつた事など悉く聞いて知つて居る、だから夫がB町でその人に逅つた事をいつもの通り話して居たのなら或は律子も何とも思はなかつたかもしれぬ。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

事こゝに至りぬ、怪しと見れば愈々怪しいこの文ではないか。
それに他で間に合ふ要を態々B町迄出掛けて行つたのもその人故で……一日に足るべき處を二日も滯在した……假令口實はありとするも全く其人に逢ふためではなかつたらうか、と、かう邪推の出來ぬ事もない。
殘念で〳〵たまらない、律子は唇をかんではら〳〵と涙を落した。
「あゝ欺されて居たんだ」
この人はと信じて居た夫にさへ今この事實を見出した、欺されて居たんだ、眞實と思つて聞いて居た夫の言葉の、どれが眞で、どれが噓だか分からない、まるでつかまる所がなくなつた。
千日の芽も一瞬時にたかれて空しい死灰のみ冷たく胸に殘るのではあるまいか。
空の空、世の中の何れの所に信じ得べき者を見出し得るであらう？　全愛の結ぶところの外に眞のホームがあり得るであらうか、ホーム！　ホーム!!　樂しき夢も消えてしまつた。
尋常一様の一些事も人情の機微に觸れては大なる音と鳴響く、紙障を隔てゝ相見がたく、一點の秘事も夫婦の間の越え難き障壁となるのである。
律子の前にはモウ其障壁が築かれた、今迄信じた其度の深かつたそれだけ其障壁は高か

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。

淋しい感傷の胸は暮れゆくあら野の原に取殘されたやう、岸をはなれた捨小舟の賴ない思が犇々と寄せて來る。

どう考へても口惜しくてたまらない、今迄欺されて居たのだ、眞面目に賴つた自分の顏が嘸や夫の眼には意氣地なく見えたろう、思へば耻しくもあり、馬鹿々々しくもあり、もうたまらなくなつた。

嘲笑するやうに平凡な鳥が空をかすめて森の彼方に去つた。林は暗く裏の小川のせゝらぐ水を、玉を轉ばす音とも聞いた昨日の今がなつかしい。

死なば共にと誓つた昔が淺間しい。凛とした夫の顏さへ恐ろしくなつた、强い其手には許し難い、いやな血か充ち滿ちてる樣て快活な聲さへ悲しい怨を誘ふ。

「福音があるよ」

と夫は機嫌よく歸つて來た、けれども懷しい心は消えて居た、只形式に迎へて笑顏一つ見せようともせぬ。夫は帽子を投出すと勞れた樣にどつかり座つて、律子のそばの手紙に氣がつくと「誰から來たい」と何氣なく手をのべた。

「フムあれか」

と云つて讀んで居たが、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「ホンに、この女に逅つた、途中で逢つたよ、そして學校の事など立話した、」
「だつてそんなお話聞かなかつたわ、」
「いそがしくて、そんな不要な事は忘れて居たんだ」

三

「いそがしくて要のない事は忘れて居た」と云はれて見れば、成程と承知してもよさそうてはあるが、平素の夫の言動より推せば、まだなぜだか笑つて鎔け合ふ氣にもなれなかつた。

ふだんは要のない事迄何も彼も語つてしまうくせにと直に反感が起る、若しこの手紙を自分が見なければ、或は永遠の秘密として葬去る積てあつたのではあるまいか、自分に見つけられて餘義なく苦しい辯解をしてるのぢやあるまいか、

「私、今迄欺されて居たんだわ、」

胸の中で渦を巻いてた悔しさが思はずこの一語に發た。

「欺された？　誰からだい。」

夫は驚いたやう、愁をおびた美しい律子の顔をジッと見た、

「貴郎からよ、」

「俺から？」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「然よ」
「馬鹿な、何を云ふんだ、この手紙でか……馬鹿ッ……」
「どうせ私馬鹿なんです、馬鹿だから今迄恁うして貴郎に欺されて居たんだわ、」
云ひ〳〵松子の手紙を丁寧に自分の懐中におさめた、
「どうするんだ、そんなもの、」
「私が貰つとくの、とつといて要があるの、」
「余程どうかしてゐるよ、そんなものが何になるんだ、つまらない、」
「これでも言を云ふ時があるんですから、別離る時お友達やなんかに離縁の理由を發表するの、」
「それでッ」
「その理由の一つになるのよ、」
「ハヽ……お話にならない、」
と遂に夫は笑ひ出した、律子は悔し氣に眼に一ぱいの涙を溜めて臺所の方に行つた。
軈て淋しく夕餉の膳に向つて、平素のやうに花やかな笑聲も漏れず、後かたづけもランプの掃除も無言てすました。六疊の間をザッと掃いてランプを點けると、まだ無言て火鉢のそばに來て、詰らなそうに頬杖ついたまゝ伏目になつて默つて居る、灰の色を見てる眼

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

てもない、只心の中に信じられない世を見て心頼ない瞳てあつた。

「馬鹿な奴だ」

と夫は打解けて其頬を突ついて見たけれども彼女はにつこりともしない。

「オ、然だ〳〵、先刻云つた福音だ、京都の兄からなあ、お前に……最新流行のお召を一反送つた、と、三田君の手紙の端に傳言がしてあつたつけ、」

と快活に氣を引立てるやう勢をつけて云つて見たが、律子は今に及んで、そんなものが何にならうといふ様な淋しい雲につゝまれて居た。

「弓張月を讀もうか、ム、？聞くかい」

と机の前に長くなつて小形の本を取出したが矢張氣乘がせぬらしい。阿の彼のと機嫌をとるのも秘密を知られたてれかくしかと律子は餘り嬉しくもなかつたので。

「オイどうしだんだ、」

とグイと其手を握つて引寄せた、温い血は男の血管を空しく流れて居た、床の下できり〳〵すが鳴き出した、萩の花がほろりと散つたやう律子の膝の上には温い雫が落ちた。

何にも云ふまい、思ふまい、思つたつて欺の世の中だ、暗い〳〵闇を探り、廣い淡い野をさまよつて遂に墓場にたどり行く悲しい運命の子だもの、道すがら摘む野ばらの花にトゲのあるのは當然だろう、と恐ろしい影が黒白もわかず其眼を掩ふた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「馬鹿な事云はないで、モウそろ／＼寢ようぢやないか、」

と夫は眞面目な態度でから云つた、「おやすみなさいよ」と律子は獨語のやう。

「お前もさ」

と云ひ捨てゝ用足しに立つた男の姿が障子の彼方にかくれると、も一度、先刻の文を出して見た。長男〇〇を作れてとあるが若しや……若しや、自分の夫の子ではあるまいか、彼女は我心のおのゝくを覺えた。夫婦喧嘩も自由結婚に伴ふ心安さが度を越しての事と思つて居たが……若しやまた云はれぬ原因があるんぢやあるまいか。……

＊　＊　＊　＊　＊

拂へども／＼遂に怪しい影は去らなかつた、世の中の何ものをも信じられぬと、つく／＼思つた彼女の胸に唯一つ、つひぞ懷しいとも思はなかつた昔の人の戀が悲しい影の奥底に殘月の如く淡く浮び出づるを覺えた。

四

律子の眼には五年前の雪の山里が見える、氷の如な冷たい月の光を避けて黒い男の影が幻の樣に忍んで來る。

彼女は學校を卒へると直に、さる銀行家の許に嫁ぐべく強ひられた、けれども薄つぺらな、只浮々とした人生の表面を歩いてる樣なその銀行家の態度が傑とする程氣に食はなか

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つた。假令、金はなくとも、名はなくとも、只誠ある人格こそ眞に貴いのだと云つた、が赤心をこめたる美しい清い乙女の言葉も、それは世間を知らぬ少女の空望として無下に退けられた。

父にも容れられず、母にもゆるされず、彼女は自ら確と決した、自ら身を退いて深山に引籠り其地の小學校に職を奉じて自活の道を立てた。そして誠ある人を夫とし自分の希望の啻に乙女の空望にとゞまらざるを證すべき時もあらんかと獨り心を慰めて居た。

野村と云ふ男は其山里に居た。

村長の息子で、中學出の青年で、山村では先づ新らし空氣を吸つた、それで温情のある、どつちかと云へば沈んだ男であつた。

近世の文藝や、時代の思潮に趣味を有つものは、この部落で先づ野村と律子と認められて居た。口の悪るい仲間等は二人を好一對だと、からかつたり、二人の間に既に何かの默契が成立してるかの樣随分皮肉な噂をするものもあつた。

それらの流言を耳にした野村は、恰も心の秘密を看破されたやう青黑い顔を赤くして人知れず會心の笑を漏した事もある。男の胸にはとくより打消しがたい戀の炎が燃えて居た。併し律子に於ては野村を以て自分の意中の人となすにはあまりに見識が高かつた。村長の息子であり乍ら中學も四年で退學した、それも、血統の胸の病を恐れてゞあると人傳

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に聞いた律子は柔らかい同情の眼を以て其人を見たが、それも自分と何の交渉もない間の事であつた。フトした事より悶々の情を文して打明けられて以來、何故だか其人の厭な點ばかり目につくやうで無論其戀を迷惑に感じたのである。迷惑に感じながらも亦其あはれな運命や、悪意のない沈んだ人柄が多少の同情を惹いて只普通の友人として言葉も交して居た。

野村にとりては消えきらない律子の態度が愈々悶々の度を進めるばかり、彼は矢の如くその文を送つて苦しき思情を訴へた。

「男子の愛はカンランの森の火事の如し、炎々として天をこがし、如何にして其誠意に報ゆべきかを知らざれども、翌朝行きて見よ只冷々たる死灰の殘れるのみ」とシュライネルが云つた如に貴君の苦痛も暫時の御辛棒でせうよ、」

と五つも六つも手紙が來てから、やつと律子はかう云つてやつた。あんまり馬鹿にしてるやうだが、これ位冷酷に出ないと其火の手を打消す事は出來まいと思つたので。

けれども野村の熱情は消えなかつた。風に煽らるゝ猛火の如く益々其勢を加へたので、律子は殆んど途方にくれた。

若しか人の噂にでも上るやうな事があつてはお互に大事な身だから、以後は斷じて文通しない事にしませう。と書いてやると、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

貴女と共に立てられる浮名なら、私の無上の光榮です、地獄の中にも貴女と一緒に行くのなら樂しいと思ひます、…………が貴女は其時如何なさいます、皆はもう既に村の者も變な噂迄してるやうですが」といつて來た。

古い中硝子の障子をたてきつた二階の六疊の自分の室で机に凭れてこの文を讀んだ律子の眉は動いた、頰に亂るゝおくれ毛がかすかに慄えて、…………

「あんまり馬鹿にして貰ひませんと思はず身を起した。その文の何だか悠々然たるのが第一癪に障る、何でも甚しく侮辱せられたやうな感がする、凭う迄自分は伍し易いとされてるのか。

「失禮な」

と我知らず自尊の聲が唇をもれた。考へても見るがいゝ、いくら何だつて私が自分よりも學識の淺い、見識のひくい、あの人の妻になられるだろうか、あの顏で居て…………我身知らずの戀もするものだ。この場合フンとも云ひたくなつた。

私はモット修養もせねばなりませんから、そんな噂を立てられては、前途のさまたげとなり非常に迷惑にぞんじます、身の潔白を證するため直に辭して故鄕に歸りませう。と激した事を走らして最後の積で返事をした。それが雪の降る日曜の朝であつた。

五

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雑誌を返すのだと云つて新聲一冊に其文を添へて宿の娘に持たして出すと、何だか氣が清々した樣で火鉢の前に座ると色々と明るい將來の事を思つて見た、一年有半の間に父母の心もがらりと解けて、お前の望通りにしていゝから歸つて來いとの母の手紙も机の中にある。モッと向上しなければならないと自ら心が勇んで來た。

硝子越しに見ゆる庭の面にはもう雪が白くなる程積んで居る、風のない松の梢は繪のやうに風情を添えて、降りしきる六花紛々、梨の花の舞ひ落つるやうである。居ながら眺めるのでは飽足りないと思つて、つと火鉢の側をはなれると立つて障子をあけた。

白皚々。何ものもない、見渡す限り岡も山も、田も畑も只一色に掩はれてさながらの白金まろぶ里と化してしまつた。谷川の遠の響もなつかしい。

隣の庭の竹垣のそばで雪をかためては、四五間はなれた麥畑の眞中に亭々として天を突く銀杏の幹にぶつつけて居たいたづらの吾一が、ひよいと顔を揚げてこつちを見ると圓るい顔がにつこりした。

何だかそれに釣込まれるやうに自分も出て見たくなつた。木戸口まで行くと偶いと野村の妹に出會した。律子と同年の十八、ふつくりとした、色の白い、いや味のない娘である。何の用意もないが友人三四人と雪見の宴を張りたいから御迷惑でせうが御出下さいと兄の使に來たと云ふ。律子は當惑さうな顔をしたが、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「有がとう、態々來て下さつたの？　寒いのに御氣の毒でしたわ、………よく降りますねえ、いゝ景色でせう、私出たいんですけど、………あの昨夜少し風をひいたもんですから………すみませんが失禮しませう、………どうぞよろしく仰しやつて下さいな。」
と相手の顏色をみつゝ、きれ〳〵に斷つた。
それでも是非伴れてゆかねば母や兄に叱られると容易に歸ろうとはせぬ。律子も殆んど當惑したがそれでも決心は動かなかつた。そして先刻持たしてやつた手紙の事を思つて見た。もう先方にとゞいてるのか、それも知りたかつたが何となく氣がひけて遂に云ひ出し得なかつた。宿の娘とは、どの道かの行違ひて逢つて居ないのだろうと獨で定めて、もうついてる時分だが、と彼の文を見る時のその人の顏を想像して居た。
使の去つた間もなく宿の娘は歸つて來て富永さんも來て居られるから是非來て下さいとの傳言を繰返した。
「風をひいたんて………」
と、それのみ口實である。口實故には戶外に出て思ふまゝ雪の姿を眺める事も出來ない、しぶ〳〵室にこもつて居ると、宿の娘はお茶をくんで來てくれて、例の無遠慮な口調で野村の批評をはじめた。そして今日の御馳走のおいしそうに出來て居た事や、野村の母等も律子を望むらしい口吻をもらした事迄殘らず語つて、今日の雪見も律子と母との近づきの

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ためらしいと追加した。

律子もあまり事が進行してるんで、あきれて聞いて居た。紅葉を散らした顔のどこかには輕い侮蔑の色が見えた。

其夜の事であつた。

律子は讀さしの平家物語の面白さに靜かなる雪の夜の更くるも知らで獨机に寄つて居た。

コツ／＼と怪しい音がする。耳のせいかと思つた。

またコツ／＼と音がした。風だらうか。つゞけてまた……鳥だらうか。

風か鳥かと耳をすましたが、森として雪の亂るゝ音もせぬ、風ではないらしい、鳥らしい羽音もせぬ。

はてなと、いぶかりつゝも又讀入ると、更に音がした。「何だろう」と座つたまゝ机の前の障子を開けた。小さい白いものが鼻の先に突出て居る。律子は慄とした。こわいながらもよく見ると竿の先に結んだ文である。

律子は夢心地である。フイにおそはれた疑念と恐怖に石の如く彳んだ。ジッと氣を鎮めて下を見ると籬の外に黑い影がある。たしかに見覺ある男の姿が凍るやうな月の光をさけて……

六

とても本氣の沙汰ぢやあるまいと云ふ感が直に律子の胸を突いて哀はれにも思つたが、また恐怖の念も加つて、只不思議に忿怒の情のみは出て來なかつた。

併し其文は受取るまい、言葉も交すまい。局外からこの光景を見たら何といふだらうと己れを謹む心にぴつたり障子を締めた。と思ふと慌急しく亂れた音がして中ガラスを打ち、如何にも物狂はしいさまなので若しや階下の主人に見つけられては大變だ、名も惜しい。取つてやらなければ、どんな物狂はしい事をされようもしれぬ、はては忍足の恥も外聞も忘れて、萬一大膽な事をされてはと、とゞろく胸を袂に押へて竿の先の文をとつた。

彼は滿足げに身を退いて離のがけに身をひそめた。

律子は打慄ふ手に結んだ文をといて見た。

夜は森閑として何の物音もない、只遠い谷川の淋しい水音が、眠れる萬象の間を流れて居る。然らでも人の情の身に泌む頃を彼女は戀に悶ゆる、哀愁あふるゝ涙の文を讀ませられた。切々の情緒は其飾なき紙面に滿ちて居る。「出來るならば割つても見せたいこの胸を貴女はちつとも察して下さらぬ」と怨む文字の悲しい戀の誠心を語つて、たほ涙に滲んだらしい筆の跡は、ふみ迷ふ戀の暗路の悲しさを訴へて居る。

「そして歸るなどゝは夢にも云つて下さるな、私も隨分不遇の身で少さい時から色々悲しい事にも遭遇つたが今日の御手紙を讀んだ時程悲しかつた事はなかつたのです。何卒歸

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るなどゝは云はないでいつ迄も居て下さい、歸らぬとの御言葉を聞かねば私は今夜こゝを去りかねます」と終りに書添へてある。

律子は慄えながら繰返して三度迄讀んだ。

彼女の美しい眼よりほろりと涙が滞れた。

これ程迄自分を思つてくれる人を、捨てゝ去るのは果して自分のとるべき道であらうか……

……と、眞に律子が深い男の情に報いたのは只この一滴の涙であつた。

けれども彼女の心の奥の奥底には深く〳〵泌み付いてる或ものがあつた。

男の影は動き出した。待ち侘びて氣も身に添はぬらしう、彼方に行き、此方に忍び、戀ひに狂へる心に分別も出來ぬらしい。

律子も氣が氣でない、丁度階下のこの窓は主人夫婦の寢室である、若し氣づかれようものなら何と云ひ開きが立つてあらう、………律子は筆をとつた。手が震へて、胸が騒いで仕方がない、やつと「辭表は出しませんから、どうぞ歸つて下さい」と紙片に書いて結んだ。

そつと障子を開けると籬のもとの黒い影が動いた。フト雪を踏む足音が耳に入る。はつと思はず身を退いて胸を押へた。野村の姿は遠くの木かげに消えて、村の青年のどこぞの歸りらしい、頬冠をしたのが、直ぐその道に現はれた。そして我不關焉と西の方に行つて

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しまつた。

野村の姿はまた木かげをぬけ出てた。例の離のもとに忍び寄る。

律子はシヵと見定めて結んだ紙片を投下すと追はるゝやう急いで雨戸を繰つた。それつきり燈を消して寢てしまつた。

＊　※　※　※　※

あゝ其の雪の夜の光景が浮んで來る。

其後律子が辭し去つてからも野村は矢のやうに文をよこした。寫眞もよこした。けれども律子は其文をやき、其寫眞を送り返した。そして「可惜御身を青春の血潮に誤り玉ふな如何なる場合にありても飽迄男らしき行動をとらせ玉へや」と深切に眞の厚意を以て書添へてやつた。その後二三年經つての事である。親、親戚のすゝめに止むなく他から嫁を貰ふ事になつて、愈今夜が輿入と云ふ其夕彼は俄に吐血した。そのまゝ寢込んで翌年鳥鳴き花落つるの候ゆく水と空しく流れて遂に黄泉の客となつた。

つひぞ懐しいとも思はなかつた其人の戀が、せめてもの誠と今胸に浮び出る。

「あゝ誠！　眞！　世の中に美しい誠は、思へばあの野村の戀のみであつたらう、信じ得べきはあの戀の誠だ」

破られた灰色の心に怪しい淋しい光がさす。夫に對する信は已に破られた。彼女は永久

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に破られざる眞の信を切に〳〵探り求めたかつた。

其心の眼には青い目鏡がかゝつて居たかもしれぬ。結婚以來の不愉快な事のみ思出されて、どうしても自分で自分の心を左右する事が出來ないやうである。不思議な怪しい影に隔てられて眞の夫を見る事が出來ないのであらうか、果して青い目鏡をかけさせた夫の過失であらうか。

樂しい緑の夢さめし一羽の蝶の、遂に得られぬ誠を追ひ、無限の界をあてもなく放浪せねばならぬ寂莫の涙が胸一ぱいになつた。

身にいやし難い感傷を抱き、遠い誠に憧れて、律子は野村の戀を思ひつゝぼんやり家を出た。

――完――　（十月二十七日）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

痛みと藝術と

上野葉子

人間呱々の聲を揚ぐるより果して何を追求してをるのであらうか。將又たゞ漫然と自然の力に知らず識らず押し流されて行くのであらうか。人並に笑ひ人並に興じて春の花の散り、秋の野の枯れて行くと云ふ現象を目の前に見ながらひたすら當然のことゝして、無意識に看過して行く人々には、追求と云ふ詞は或は無用かも知れない。毎日の出來事の起り來るが儘に、搖られ搖られて今自分は如何なる地位に立つてをるか、いかなることをなしつゝあるかと云ふことさへも、自覺せぬ人等には、追求と云ふ詞は或は意味のないことかも知れぬ。一度花間を渡る暮鐘の音に耳を傾け來つたならば、其響きがたゞ偶然の出來事として聞きのがすことは出來なくなるであらう。雨のしとしとゝ降る日に垂れこめて、街道の車の轢るを聞き澄してゐる時に、彼等の行方を考へ來つたならば、たゞ偶然の努力だとして聞きのがすことは出來ないであらう。世界といはず宇宙といはず、吾々の前に開展せられて來る有ゆる現象に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ついて靜に默想せずや。此はてしも無い大きい美しい蒼穹よ。無數の星晨は物皆の死に果てた闇の世界に明滅のまたたきを投げて、愁人の胸に痛ましい訴へを刻むでをるではないか。吁あの青白い月の光、私はただ思ひ浮べたゞけでもう胸が迫つて來る。歌舞管絃に浮世の風が外を吹いてをる奥殿の欄干にも、そと佳人を泣かしむるではないか。鬼神をもひしぐ勇猛の士も、朔北の野白砂雪の如きに皎々と中天に澄み渡る時、いかで征衣の淚はざらむ。俄然一つかみに萬物を破壞し去る夏の夕立の痛快であり、漠々たる大原の夕の空、時に底深い紺青のとばりは飽くまで平和の譜を奏でてゐる。時に怒れる獅子の胸の炎の樣に眞紅といはず、紫といはず、樺に、コバルトに、黄に、灰に、引き掻きまはした樣に狂ふた亂調な惱ましい色彩を刷いてゐる。佳人が品定めした春の曙は云はずもがな、勇士が駒に散りかゝる關山の花。二千里外故人の心を偲ふ時、ボツ〳〵と軒に音なふ雨垂の音の何と云ふ靜けさ。天を摩する芙蓉が峯。錦衣綠帶流れも淸き二荒山。波に掉さす湘海の濱。いかで氣高かゝらねかは。時に又造化はガランとして飛ぶ鳥のかげさへ止めぬ二千里の大漠を徒に横へたり、ベスビヤスの頂から火を吐かせて、かの追懐の多い、世界の骨董品ポンペイを埋めたり、山の樣な狂瀾怒濤の巨腭を開いて、沿海の醇朴な無辜の民を呑むで仕舞つたり、げにも凄じい粗大な惡戲を弄するかと思へば、七十五元素をいかに混ぜ合せても企て及ばぬ微細な色彩を一輪の花、一葉の脈に刻むである。植物の種子は地に落ちて、や

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がて二葉に芽を出し、花を咲かせ實を結ぶ。かくて幾億萬刧同じ事を繰りかへしてゐる。鳶は雄揚と空に舞ひ、魚は潑溂として池に跳ねてゐる。悠久なる天地の一隅に立つて、大自然の驚くべき技巧の手際を靜かに、心靜に、眼を凝し耳を敧てゝ味つて見給へ、南洋の濃い色彩に包まれたあの怪物の樣な大森林の香、赤裸々な晩秋の骨立つ疎林のさゝやき。あゝ此永遠に聲あつて聲なき自然の前に私たちは奈何するとも出來ない。更に視給へ、此白い柔い羽二重の樣な膚を、生温い波立つ血潮を、あゝまあ何處より來つて、何處に去るので有ろうか。此奇怪な肉塊を透して動いてをる不可思議なる心靈のうごめきよ。これが人間世界の有ゆる波瀾、パラダイスをも地獄をも造り出す、有ゆる悲劇と喜劇とを演ぜしむるものは此心ではあるまいか。私は今、斯うして瞑想してをるとあの都會のドンヨリとした動きが縱橫に映つて、其重苦しい樣な調子のペースが湧いて來る。一體私は何を思ひ何を考へ何を目標にして進むで(?)をるのであらうか。人々は何を意識の圈内に浮べてをるのだらうか。農夫は豆を蒔かうとして量つてゐる。職工は今デッキの上に破損を繕つて居たが、つい誤つて海中に足を踏みはづした、遺族は路頭に迷つてそと目をつぶつて生れた赤子の首をしめた。當路者は一將功をさなむとして萬骨枯るゝは古今の通勢だと云つて一向平氣で泰平の盃をあほつてをる。堂々たる紳士は髯をひねつて公德を述べ立て、青年に大喝を浴せかけながらさる佳人に魂を奪はれて糟糠の妻を虐待してゐる。今しがた神の道を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

敎へて會堂を出た牧師は、人妻にそと肉迫した。支那には革命軍が起き、伊土は劍戟相見え、モロッコに紛議囂々として、列國は干渉か、中立かと氣を揉むでをる最中に、鎭守の森かげには黑い男女のかげ法師が動いてをる。詩人は天を仰いで詩心を沸かしてゐる。一日二十錢の賃錢から貯金した五十圓を慈善事業に寄附した隣の爺がそこら界隈の貧民を感化してをるかと思へば、自分で法案を立てた御役人が莫大の官金を胡麻化してをる。天下の名譽を集めて、九死に一生を祈つてをる貴族の別莊の裏手の海に、若い女が身投げをしたと噂さが立つた。今朝の新聞紙を寛げて見た時に、文部大臣が高等女學校長を集めて道德敎育の訓示をしたとある次の欄に、敎育界の一大問題として、あるレデーの萬引公判の顚末が掲げられてあつた。英國外相が獨の宰相と會見したと云ふて、其底の暗流を揣摩してゐる。官吏增稅案が通過した結果、吳服の値段が一割方騰貴したと內務大臣が澁面を造つてゐるポンチ繪が出てゐた。深川の吉公が助太と博賭が甚て出刄騷ぎになつたとも傳へてある。あはれソロモンが榮花は槿花一朝の夢にして三千の佳人が旦に裝を凝した阿房の宮殿は、楚人が一炬の煙を化し去つて、今は黃鳥の淋しい叫びを止むるのみ。昨は王者の驕を極め、今日は南海の孤島にさすらひし英雄の末路。長生殿の春の夢酣にして俄に起る風雲にもろくも散りし平家の一門。あはれ常なき人生の榮枯。吾々は是等に向つて何うともすることは出來ない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秋の如く澄み切つた理智でもつて眞理を判別して行くことはいと易いことである。眞理に二つはない、四を二で割れば二となると云ふことは將來はいざ知らず、今の處誰れが打算しても同じ結果に到着する。私はかつて古ぼけた男扇子に人生行路難は險にあらず、岨にあらず、實に人情反覆の間に在り（原漢文）と物してあつたのを見ていかにも穿つた其言葉に對して感歎に堪へなかつたことが有つた。神變定りなく、電流の樣に鋭敏に形容詞を見出さぬ程複雜に動いてをる人情の機微は、實にもソロバンの桁をはづしてゐる。美人一度笑つて國傾く、玲瓏玉の如き智慧者も一度纏綿たる人情の絆につながれては忽ち心眼の網膜を曇らせて仕舞ふ、仁愛、正義、謙遜、花野の春の樣な美しい情操の姿を秘めてをる反面に於て、恐しい憤怒怨恨、貪餕、嫉妬、傲慢、凡そ醜い惡の華を織り出して、善と惡とがもつれもつれて、凄しい爭鬪に心は修羅の巷となる。或は其身の薄命をかこつ悲歎の聲となり、或は迷ひに迷ふ呻きとひゞく。盜めば罪として檻に籠め姦すれば不倫として獄につなぐ。怠惰、放慢、强情、殆ど手に餘る無賴漢は産みの親さへ之を見捨てるのである。けれど之も宇宙の現象ではないか、然も人間の一擧手一投足といへどもたゞ偶然に表はれて來るものではない。斯る行爲の由つて來るまでには幾曲節を踏むでをるであろうか。必ずや複雜な涙が宿つてをるであらう。心靈の光はとても物質の分子原子どころではなく、より幽玄な、より微細な働きである。斯かる心のさゝやきが千態萬姿に響いて來て世の有ゆる色彩を染出すのではあ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るまいか。此心靈と此自然と相對立した時に其處に何んな意味が有るであろうか。人愁ふれば萬物愁ふ、人喜べば萬物喜ぶ。そこに何んな數理が有るであろうか。森羅萬象は斯る方圖もない渦卷の中に投ぜられてただ無意味に卷かれてをるのであろうか、吾々はただ無意味に存在を續けてをるのであろうか。天地開闢の始から此とりとめもない人生と永遠に默せる自然とに向つて、幾億の同胞は恐れもし、疑ひもして來た。幾多の哲人は悩み通して來た。

幾多の科學者は四方八方から有ゆる武器を浴せかけて來た。けれど吾々の行方はつひに明言せられてゐない。宇宙現象の本源はつひに悟られない。釋尊はとうとう雪山にのがれて、沈思默考僅かに慰安を輪廻因果の説に置いた。さりながら私は木の葉が吹き散らされるにも、何かの意味が有る樣に思はれる。亂脈の樣な現象界にも歎じ來ればいかにも整然たる調和を見出すとが出來る。美しい、美しい、絶妙の綸畫を見出すことが出來る。亂脈なる現象はさながら大いなる美の表象ではあるまいか。燦々しい現象界の響きはさながら大いなるリズムではあるまいか。吾々の前に開展せられて有る言はざる現象、これ悉く亂脈なる美術混沌なる絶大の魔術ではなかろうか。思ふに、物皆は此大いなる美の本源に向つて走りつゝあるのではなかろうか。不圖觀じ來つた時にもはや懷疑の沙汰ではない。かの原始時代の素朴なる人民が、天體を畏敬し、崇拜した樣に、宇宙の美に向のてむしろ匕を投げて、痛ましさ悩ましさやる瀬なさを訴ふるの外ないのである。西行や、芭蕉や、遂に恩愛の絆を斷つてま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でも、無窮の自然美に憧憬れたてはないか。かの和歌俳句は其憬れの迸りてある。畫聖ラファエルは生涯を捧げてカンバスと繪具とに堪へ切れぬ憬れを訴へ、フイージアスは大理石に悩ましい痛みを刻んだのである。大小の沙翁、近松は渾身の痛みを幾百の劇にかりて、綿々絶泣の中に生涯を終へた。短い鋒の穂先から滴つた累々たる血痕は、時間空間の有らむ限り生々しい鮮かな印象を刻てをる。ハイネ、ウヲルズウォースの徒は張りつめた悲哀、燃え立つ炎に堪へ兼ねてとても多くを言ふ餘裕をさへ持たないで、切りに短い叫びに嫋々たる餘韻をひゞかせた。はた月下にリラを彈じて、ギリシアの海に投じた女詩人。琵琶を擁して關山の秋をかこち、青葉の笛に鬼神を泣かしめた愁人よ。あはれ絲竹に長い思を叫ばせた、彼等はげにや美の大覺人である。吾々の小い眼には、餘り大きすぎる大魔術の中から、かすかなリズムを見付け來つて、小い紙に、小い像に、その俤を漂はせつゝ美の堂奥に自ら慰めた。繰りひろげて行くには餘りに長い劇の中から、かすかな緒を見付け出して來て、短い鋒を呵して其傷手を美の堂奥に自ら慰めた。吾々がきゝわけるには餘りに亂脈なリズムの中から、かすかな緒をきゝ付けて、やる瀬なき叫びに其痛ましい心を美の堂奥に自ら慰めた。彼等は其正體さへも知ることの出來ぬ、絶大なる美を對象として抱いた。大いなる憬れの痛みが滴り迸つてつひに世界の藝術となり、千朶萬枝の傑作となつたのであろう。痛みが深ければ深いだけ、憬れが强ければ强いだけ、其ひゞきは美しく痛切となつて來る。藝術はたゞ單に拔

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

巧の産物ではなくて、實に人間の最も眞面目な叫びでなくてはならぬ。水の迸流する樣に、内に漲る憧憬の堰きあへず凄しう堤を決して激流する處に、人生の聲が響いてをるのである。決して、決して、遊戲的木劍の類に眞の藝術は花咲かぬであらう。藝術のための藝術。生活の方便の藝術。そんなものに何うして生命が宿らう。西人の誰れかゞ「目的は屢人生に意義を與へる」と云つてをるが藝術の唯一の生命は憧憬れではなかろうか、否憧憬は人生に意義を與へると云ひ度い。生命と云ふ詞の一面には價値と云ふことを意味してゐる。價値は相對的で、對象のなき所に價値を見出すことは出來ぬ。かの屢社會の有ゆるとに失敗して、疲憊、倦怠、自棄、自暴、つひに向ふべき對象——事業なり研究なり愛なり——を失つて、全く人生の空虛に染々寂漠を感ずる時、生存の價値は失はれるのである。たとへ衝動的に生きてゐるとしても、そこに人生の意義は認められぬのである。世に藝術と稱する藝術はいと多いけれど、人を動かす傑作は世界を通じて數へる程しかないと云ふも、一には技巧の到らぬ節もあれど、未だ美に對する熱度が低いのではあるまいか。さらば世の覺人、獨り生命をつなぎ、かの毎日營々としてたゞ食せむがために働き、着むがために走つて、敢て疑はず、然も人生の空虛をも感ずるとなくして、死に行く人々には、先天的に何等高い憬れをも疑ひをも持たないのであろうか。　人生などて生命なきを得む。何人の心にも其底のドン底には生命の暗流がなくてはならぬ、　たゞ其生命を自覺せぬまでゞある、生命を喚び起さぬまでゞある。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

吁人生、一度此生命なるもの、覺醒し始めた時に、吾々はぢつと落ち付いてゐるとは出來ぬ。追求！　憧憬！　吾々は何ものかに向つて走り始める。ほのめき渡るあるものに向つて追求し始める、廣い廣い宇宙に向つて、大膽にも探り始める。そして小いながらも、低いながらも、或は筆に、或は斧に、或は尺八に、痛みをよせつゝ美の堂奥に辿り入らうと追求する。偶々、覺人の傑作に會へば其己が訴へむとして訴へ能はざる、叫ばむとして叫ぶすべを知らざる痛みの琴線は、一々共鳴し、覺人の血潮は吾々の渇し切つた五體に流れ込むで、有ゆる節々を刳るのである。覺人が眞劍の叫び、痛切な訴が、世界の人心を警醒し鼓動せしむるのではないか。

「蘇生の日」の主人公ルベックは、最初藝術家を以て自ら任じ、藝術を以て最後の目的としてゐた。そして彼は、其モデルを探して幾多の彫塑を試みたが未だ意に充たない。偶イレーネと云ふ婦人に出會ふと、いかにも彼女の理想美に動かされてモデルたらむことを願ふ。イレーネーは快諾して、親も捨て兄弟も捨てゝルベックの家に來つてモデルになる。幾年かの後に完成したそれが、世界の耳目を聳かした傑作「復活の日」であつた。ルベックが後日イレーネに自白する様に、實に彼には復活の日の前に彼の彫塑なく、復活の日の後に彼の彫塑はなかつたのである。

「お前は私にとつては決してモデルではなかつた。お前は私の仕事の源泉であつた」

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「其後は一つも詩を作らなかつた――只模塑ばかりして日を消してゐた」
ルベックは自ら藝術のための藝術を織りなすつもりであつた。が何ぞ計らむ、彼の天才はむしろ其崇高なる純潔なる理想美によつて喚發せられたのである。此復活の日が世界の傑作たる所以は、それが彼の憧憬の高潮から湧き出た眞の滴りであつたからではあるまいか。イレネーに別れてからは、如何にも唯模塑をしたにすぎない。其作品には憬れの生命は宿つてゐない、所謂馬や牛の顏の樣なものばかりであつて靈が入つてをらぬ。然し彼はイレネーの美を愛したと云ふて、たゞ美其ものにあこがれたのであらうか。彼が復活の日の完成せむとする時に、イレーネはルックの藝術を憎て去つて仕舞つた。ルベックは暫しはそれでも堪へてゐたが、程なく彼は妻のマイヤにこんなことを云つた。
「世間で云ふやれ藝術家の天職だのやれ其使命だの何てい事は其根底を究めて見ると些の意味もない――空虛な無益なものだと思はれて來た」
「此所を御覽。私は此處の中に(胸)佛舍利の函を持つてをるんだ。そして其匣の中には彫刻の幻影が納めてあるんだ、所が例の女が去つて仕舞ふと同時に匣の錠がをりて終つた。其鍵は例の女が持つてゐる――鍵を以て何處かへ行つて了つた――所がお前は鍵を持つてゐないだらう、て匣は其儘て使ふとが出來ないて、舊のまゝだらう、そして年は立つ――私は實の持ち腐れだ。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ルペックは仕事の中途に幾度イレーネに手を觸れやうかとしたかも知れない。がそんな肉慾が襲つて來ると彼の藝術は壞れて了ふので、たゞ何か崇高なものにでも接するやうに、敬意を以て遇する外はなかつた。此を以て見ればルペックの藝術はイレーネを愛する戀の讃美であつて、復活の日は其戀の表象、美の形骸にすぎなかつたのである。彼は自覺すると共にもうぢつとしてはゐられないで、再びイレーネを探しに旅に立つたのである。赤い血の漲つてをる人間の心靈は、温い血によつてゞなければ終極の慰安を求むることは出來ないだらう。イブ、アダムが罪を犯し始めた以來、人問世界に情史の絶えた時は一刻もない。伊弉那岐伊弉那美の二神の昔から、母は子供のために生命をも犠牲にしてをるではないか。否、生きとし生けるアミーバの末に至るまで、愛の翼に温めらるゝのである。孔子道を說くに當つては決して仁を強いたのではなくて、人間生活に最も必要な糧であつて、之を行ふ心持ちはいかにも美だと觀じて、遂に默することが出來ないで、天下四方に鼓吹したのであらう。キリストが愛を神と云ふ形にかりて血を以て仕へたのも、愛が萬物の極美だと觀じたからであらう。吾々が善を慕ひ、愛を戀ふるのは義務の何のと云ふ様な淺墓なものではなくて、げにそれが美を愛する至情に根ざして來ねば眞に貴いもの、美しいものとはならぬであらう。一時の好奇心に驅られ、たゞ單に、本能の滿足を以て結局としてをる様な戀愛に、高尙なものゝないのも無理ならぬことではないか。愛國の士が一身を犠牲にするのも、祖國を思ふ美

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しい至情に出でたのであらう。忠臣が君の馬前に命を捨つるのも、君臣の情に堪へ得ないからである。論語やバイブルや義士傳が依然として人心を支配し、人心を動かして行くのは此美に對する熱烈なる憬憧のひゞきだからではあるまいか。あゝ此溫みよ、まあ何と云ふ美はしい油だらう。灰色に枯れかゝつてをるわびしい人間の心に霑ひを與へ、失意の遊子に蘇生の口を繰りかへさしむる、げにも貴い至美ではあるまいか。萬物は此愛なる美によつて生存の意味を與へられるのである。さりながら美しい薔薇の花かげには、恐しい刺がゝくれてゐる。悲しからずや吾々は醜惡の地上に足を踏み入れて、殊勝にも僅に延び上つて美の世界をあこがれてをるのである。美談や、義節の割合に惡事の傳へが多い。喜劇の割合に悲劇が多い。幸福の割に不運が多い。が靜に觀じ來つたならば善は固より美である。平和は固より美であるが、より深刻な美はむしろ此闇黑面に潛むでをるのではなからうか。

浮世の義理につまされて、わりない戀を網島や硯川に沈めたのは破倫とは云へ、無慘とはいへ、そこに動かしがたい、絡んだ同情の涙もそゝがれるのである。嫉妬怨恨の産む活劇。捨て鉢な面當て、これも皆悲壯な運命の仕業だと考へ來つた時に、慘憺たる哀史の紙背又かすかに、然も電光の樣に銳く漲る痛快に打たれるであらう。花の爛熳たる天國の美は云はずもあれ、凄じい地獄の惡美に腸を斷たれるではないか。美の宮殿の裏面から、人情曲節の機微に驅り立てられて、一管の筆を握つて入堂した沙、近、は勿論イプセン、ツルゲネーフ、ゾ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ラ、ハウプトマン、モーパッサン、さては本朝幾多の覺人の傑作を見る毎に、水底に潜める憧憬の金石は悉く鳴り出て、人をして胸を擁して讃歎措く能はざらしむるを見よ。私はかつて上野の音樂會に臨むでユンゲル氏のヴイオリンを聞いた時に、あの先生と音律とが融け合つて渾然たる悲壯と云はむか、歡喜と云はむか、泣くが如く、叫ぶか如く、訴ふるが如く、悲しむが如き樂の音にすつかり醉はされて仕舞つて、此儘死んでも遺憾はないとまで思つたことがあつた。かの浪花節義太夫語り等の名手が何時の間にか滿堂の人士の魂を奪つて、遠い遠い美の世界に拉し去るを見ても、いかに傑作が眞劍であるか、吾々の美感は其崇高、艶麗、凄壯、はた沈痛なる藝術によつて創るが樣にそゝらるのである。「寸鐵人を殺す」と云ふ詞は屢々人の肝膽を射る形容詞に用ゐられてゐる。高潮を吐く時、たとへ其詞は短くとも人を動す力を持つてゐる。

起きて見つねて見つ蚊帳の廣さかな

誰れしも首肯せざるを得ない。三勝半七や、ヘッダガブラーや、ルージンや、何時の世にも絶えない。吾々は時に血を沸かすけれども、それを訴ふべきを見出さない。徒に悶々の情に堪へないで切めては覺人の訴へをかりて痛歎、悲憤、懊悩、はた憧憬のやる瀨なさを癒すのである。技巧は勿論、藝術に大切な要素ではあるけれど、それは第二であつて、かの和歌にしても萬葉ものが人を動すと云ふは、眞に素朴な憧憬が詠嘆となつて韻をなしたからであらう、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

從てそれ等詩人の頭にはむしろ藝術的思念はなかつた樣に思はれる、古今以後漸く作歌と云ふことが行はるゝ樣になつては、よし技巧は進んだにせよ生命は失はれたものが多いのを感ずる。

カーライルや、エマーソンのヒーローウォーシップは宇宙に於ける傑作中の傑作たる美の有ゆる權化ヒーローに對する憧憬の聲ではなからうか。吾々は此偉人に對つて崇敬羨慕すると同時に、あの垢拔けのした天才の前に、いかにも己れの力の微弱を感ぜずには居られない。此感念が昂じては、そこに初めて宗教的色彩を帶びて來る。哲學的見解に依らないで、情念の境域に踏み入つて來る。

凡そ宗教と云はず、藝術と云はず、道德と云はず、たゞ此絕對美に對する叫びの中にのみ眞の生命の聲を聞き取ることが出來るのではあるまいか。經世家が社會の各方面に肝膽を碎き、實業家は經濟的方面に、敎育家は人心の指導に、殆ど席の温まらない程の貢献も、若し、其根本に於て混沌たる美の流れに棹してをらねば、必竟何等の結果をも見ることは出來ないてあらう。

吾々は雨の日に街道を軋る車の行方が何て有るかを瞑想することが出來る、九尺二間の裏店の生活をも瞑想して見度い。監獄の中の生活からも何ものかの聲を聞いて見度い、彼等は自分自身の走りつゝあるものを自覺することなしに、通り過ぎて仕舞ふのではあるまい

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か。彼等は斯かる疑を懐くことなしに死て行く幸な人なのであらう。さらずば彼等は何の憧憬をも持たないて、闇から闇に消え去る哀れな人てはあるまいか。美を慕ふもの、美をめづる者は、いかて自ら美の權化たるを願はないものが有らうか。此美に對する熱愛心、それが世界の隅々まで泌み渡る時に、初めて善美なるパラダイスを見出すてあらう。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

寂しみ

小林歌津子

驛の夜

長い夜を
行燈の心をかき立てゝ………
破れ琴の一節から
ゆくりなくもすべり出る
悲しい戀の物語り

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

暗いのは
ひたりと閉ぢた兩眼より
心の奥が………と泣く女
亂れ烏川の驛の夜は
しめやかに更けて行く

十二階下

疲れきつた三時過ぎの日の色は
いぎたない町に黃ろく輝やく

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

氣懶さうに——華美な袖口から
青白いうでをさしのべて
人を曳く……赤い女

慾にかつゑたどんよりした眼で
薄ら笑ふ男のあさましさ

燥いだ笑ひ聲と高調な
クラリオネットの響とが
ひくゝ軒をめぐる——
こゝ公園の裏通り。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

高原の秋

つゞき

らいてう

と同時に、主人が不在ならばいゝが、市の餌屋の方へ行つてゐればいゝがとの思ひが、ふと私の心を過ぎる。

丁度二週間ばかり前のことであつた。市に新に兵營が設置せられて、一聯隊の花々しい兵士は潮のやうにどつと入込んで、全市は湧き返るやうな御祭り騷ぎをした。赤や、青の電燈の目映い綠門は數ヶ所に立つた。提灯行列も通つた。山車も市中を引廻された。旅館、下宿屋はもとより、貸家、貸間の總てをあてゝもこのサーベル連中を入れるにはまだ足りない。俄造りのマッチ箱のやうな貸家で、暴利を貪らうとした金にかけては抜目のない手合も少なくはなかつた。

半里在の私の住居の繭仲買の離れ家さへ、役場からの命令で、或少壯士官の爲に一間を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

分たねばならぬ羽目になつた。お上からの御命令で、御命令とは家主の言ひ分だが、そこには利害關係があつたに相違ない。

もと、もと、私は外來の刺戟を出來るだけ避けて、靜思したい、と云ふ抑へがたい要求から、特にその土藏造りで、鐵棒のはまつた小窓一つしかない、灰色の四壁の、がらんとした廢間を撰んだほどなので、其所に引籠つてからと云ふものは毎朝日觀かた〲裏の流れへ行く外は、一歩も踏み出さぬほどの、極めて無活動な、內包的な生活に本來の純な自分を自覺することばかり樂しんで居たのだから、よし壁一重隔たつてゐやうとも、慓悍な軍人風情に占領されて、サーベルや拍車の音に、靜かな空氣を亂されることは堪へられない。實弟の家の座敷は屹度御氣に召さうと家主の親切顏に云ふところから、私は兎も角もと其所に引移ることにした。それが鯉屋で、實弟とはこの養鯉所の主人なのであつた。

數里東の山の中に養鯉池があるのだが、其方は養子夫婦に任せてあるから時々見廻りに行けばいゝのだと云つてゐた。こんな關係から私と主人とは已に相識の仲なのである。

信州人によく見る赤黑い、面高な、目鼻立のはつきりとした、隙のない細面の五十恰好の男だが、目に文字あり、法律の片端位心得てゐるので、何かと云へば村の總代に撰ばれたりするだけに、もう愚かと呼ばれる尊さはない。そればかりか、なまもの知りだから却て始末が惡い。彼は私を官吏の娘と知つてから急に待遇を改めた。膳に上るものは勿論、

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

言葉遣ひまでも違つたのには、いかに地方人士に官尊民卑の觀念が强いか驚かざるを得ない。私はいやな氣がした。時には淺ましくなつて來た。

勳何等、何位、年棒何圓の官吏の令孃を御世話することは名譽だと云ふ。成程私は官吏の娘に相違ない。併し官吏としての父が生命として常に重ずる社會の感情や、名譽や、體面に私はどれほど損傷を與へて來たか知れない。その私は到底官吏の子ではない。子となることは出來ない。母は官吏としての父と私との間に立つて、父に對する手前と、私に對する愛情の爲に自分の生活を全く蹈みにぢられてゐるのだ。かうまで兩親の上に償ひがたいことをしながら、なほも自分みづからてありたさに、又もかうして、其悅ばない顏を見ながら、たつてこの山國へと、淋しい心持を抱いて、漂泊の途についたのではないか。さすがに母は停車場まで私を送つてくれた。プラットフォームの薄暗い灯の下に輝く涙含んだ母の眼と私の目とが出會つた刹那の思はいつ忘れられやう。私は母を憐れんでゐるのだ。そして世の中の母親といふものを皆んな憐れんでゐるのだ。私は無位無官の人間としての父の子と若しなることを許されるならばなりたいのだ。けれど、官吏の子ではない。父が官吏の故を以て惠まれる肉片にどうして舌を鼓することが出來やう。私は只の人の子である。赤裸々なる一個の女としての私に適當の尊敬と、好意を以て與へるものでなくてはいやだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三日目に私は其家を去つて、一里外の山麓の温泉宿に移つた。けれど、浴客――ことに日曜日に遊びに來る軍人達の馬鹿騒ぎにいら立せられて、遂と主人の乞ふまゝに、此人里遠い山中の養鯉所へといよ〳〵來ることにしたのである。それに主人は大方市の店に居ると思つたので。

私はかうした不愉快や、それから導き出される生々しい色々の苦痛や、慘ましい涙から主人を厭ふともなく厭つてゐるのだ。

やがて若者は同じ位な年輩の男を連れて歸つて來た。至つて好人物だが、腕はないと云つたやうな間伸びのした顔に當惑の色を浮べて、盲目縞の仕事着のまゝで私の前に突立つた。

「ためえ様か。東京のお客勉强にくるだと爺様云ふてたけんど、おら今日だと知らんもんだで。」

主人は不在であつた。

掃除する間を待つて、明っ放しの奥の座敷に通る。平生人も住まなければ、めつたに箒など入れたことはないらしい。まだ隅々に塵が積つてゐる。古木の上に强い翅を半開いて、今にも何か掴み執りさうな氣合を見せてゐる大鷹は養鯉所の此所に設けられた年、松林を越えて遠く、池の上に舞ひ下りたのを、瑞祥がつて若者達が捕へたのだとか。小さな國旗と聯隊旗とを交叉したり、捕鷹を祝する月並の發句を書いたりしたのは子供らしく俗

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に見える。六枚の金屏風は其銹に、匂ひに先々代の先代を物語つてゐるが、日本畫の常とは云へ、平板的な、遠近法も何もない罫繪の山水の軸は縁先から眉に迫つてはいつてくる山々を遺憾なく侮辱してゐる。

山々は青葉色の裸形に柔かく起伏する。きらきらと輝く秋の午後の日を斜に浴びて、斜面一帶、穗芒の群落は其所彼所に白波を走す。悠々と天頂に浮ぶ乳色に縁どられた、ふつくりとした灰白の大きな雲の一群も山の面に影を投げては煙のやうに煤色に後から、後からと慌し氣に滑つて行く。

猛烈なやうで、力強いやうで、其奥に何ものか潜んでゞもゐるやうで、その癖ぢつと見詰めてゐると、人間の心に盡きぬ妄想のやうに、魂を汚す幻影のやうに底力のない、悲しい、はかない、遣瀬ない雲の影――山の面を滑る煤色の雲の影ほど漂泊の心をそゝるものはあるまい。

私は一體、この賴りない自然に對して何をしやうとするのだらう。何を求めてこんな山奥に來たのだらう。孤獨、々々、まあ、なんと孤獨なことか。

靜かな魂の底を分らぬほどの微かな漣ひが過ぎて、涙がにぢんでくる。過去の生活に伴ふ二三の男友達や女友達の誰れ、彼れに纒る埓もなく、果しもない思ひが心の上皮を渦卷きながら過ぎる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

……だが、私に友達があつたらうか。一人だつてほんとうの友達があつたらうか。只つた一人の人にさへ一度だつて、ほんとうの自分を語り得たことはなかつたではないか。始終大嘘を云つて居るやうな感じに苦しめられてゐたではないか。私は隠す氣はさら〲ないが到底自分の眞底を語るに堪へない人間に生れたのだ。又一度だつて、人の云ふことを心から信じて聽いてゐたことがあつたらうか、只つた一人の人の言葉さへ何時も嘘だ嘘だと思つて居たではないか。決して疑がふ氣はないのだけれどさう感じられてならないのだから仕方がない。どの道、私はほんとうの友達なんてものは有てないやうに生れ付いて居るのだ。社交によつて得られる安値な智識や歡樂が何だらう。社會我を發展させて行く……そんなことは私には理解されないことだ。私は人中に居る間に、人間の眼に浮ぶいろ〲の影を讀んでゐる間に心が瘠せるのだから、衰へるのだから……

山頂に四五本のひよろ松が立つてゐる――自在に吹き荒む風に瘠せこけて、傾いて、幹頭の少し許りの小枝もいぢいぢとしてゐる。

　雲の影はなほ煙のやうに後から、後からと慌し氣に滑つて行く。人間の心に盡きぬ妄想のやうに、魂を汚す幻影のやうに強いやうで底力なく、悲しく、はかなく、遣瀬なく後から〲と走つて行く。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

柿の盆が私の側に置かれてあつた。

荷馬車の通る路は餘程迂曲してゐると見えて、荷物の着くのは遲かつた。僅ばかりの書物や、小道具を取片付けて、床柱に凭れながら、私は茫然と坐つてゐる。縁側づたひに嫁がはいつて來た。

「お口にあひますかどうか、こんな田舍のこんだで、何もありませんで。」琥珀色に澄む蜂蜜の瓶とコップとを置いて「これ水うんと混ぜてあるさけで、お茶のかはりに御飮みなさい。」

嫁は二十三四の色こそ黑いが、田舍者とも思はれぬ華車な、上品な、子供が出來ないと聞いたほどで、どこか虛弱さうな神經質の女である。

嫁の後を跟いて來た黑猫は四四の子に絡み付かれてゐる。まあ何と見れば見るほど、大きな胴の長い猫であらう。尾の長さも確に一尺はある。あの眞黑な中から薄黃色に光る奇怪な眼はどんな不思議な世界を照してゐるのだらう。

子に乳房を慕はれて、仕方なさうに、橫になると、長くなるか、ならぬうちに、もう四四とも埋もれるやうになつて一心不亂に吸ひ付いてゐる。親猫は時々首を振つて、薄桃色の柔かな舌でペロ、ペロと子猫の背中を甜めづる。子猫は一切御搆なしと云つた風で、上になつたり、下になつたり、潛り込んだり、潛り出たり、重なり合つて吞み續ける。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は蜂蜜のことから、蜜蜂のことや、この邊の子供は野生の蜜蜂の巣を山から探して來ては、それを賣つて小遣をとるのだと云ふやうなことを聞きながら、何故か瞳をぢつと黒猫の上に凝さずにはゐられなかつた。

呑んだ蜜に心が浸つて、毛孔殘らずから、また吸ひとつた蜜は總身をめぐつて平和な思ひの中に融けて行く。

先刻から障子に止つてゐた大きな蠅が室中をぶうんと飛び廻る。

庭の小池で鍋を洗ふ手拭被りの女の怠い鼻唄が絡んで、寛ぎゝつた心の底から、今朝からの快い疲勞が輕く浮き上つて、私はうとうとして來た。忍び足に行く猫の鈴の音が微に、微に。——私は床柱に凭れたまゝ、いつか眠て仕舞つた。

犬と一緒に、稻の穗を扱く塵煙の黄色く立つ中を馳け拔けて、池の端の芒の丘まで來た時は日もいくらか傾きかけてゐた。

山間の大窪の底に暗綠に湛へられた湖は大自然の眼である。其水は秋の血潮である。活動によつて僅に目醒めてゐる凡人の心ではなく、かの靜的にして、しかも夢見たことのない智者のやうに、一點の曇りもなく、寂靜一味、默然として無爲、自から知足せるものゝや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うだ。偶々水の上に魚が跳ね上つて、銀色の弧を作るかと思ふと、幾重の柔かな輪波は水の面に描かれて、それから、それへと四周に傳はり、いつともなく靜かに消えて仕舞ふ。と一頻り呪れてもしたやうな不思議な安穩が續く。ずつと高く、額のやうに蔽ひかぶさる向ふ側の山は神々の住居のやうな赤松の老木の純林で包まれてゐる。其上を、飽迄靑い空中を、幾羽の鳶は大きな輪を悠揚に描いて、いつ迄見てゐても籡にでもかけられたやうな翅は動きもしない。空中の游泳者よ、悠々たる蒼天の覇者よ、大自然の中の逍遙者よ、自由の使者よ、靑空の中に生れて以來、まだ一度としてわるびれたことのない、あのゝんびりとした、ピンと張られた强い翅の上に私の魂をのせて見たい。

やがて、一羽がすうつと舞ひ下りて、水の面を掠めたかと思ふ間もなく、魚を捕へて舞ひ上ると、其所を中心にして、波紋は大きな輪を描いて水の面、一杯に廣がる。

池に臨んで、細長い小舍が只つた一つ、忘れられたやうに寂しく立つてゐる。其前で荷馬車から何斗ともないドキョ(蛹)を下してゐる。ドキョは養蠶の盛んな此邊での唯一の鯉の食料だと聞いたが、かうして近在から集めてくるのであらう。さう云へば今朝私の荷物を乘せて來た荷馬車もこれだつた。

煮られたドキョの幾筵は惡臭を放ちながら、西日に乾いて行く。投網でも干すやうに宙に懸けられた鼠色のフリダシ(ドキョにまだ幾分か付いてゐる絹織維を集めたもので、後

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に紡績絲に製せられる。）は大きな古綿を展けたやうで穢らしい。

小舍に一歩踏み込むと、惡臭がぷんと鼻を突きぬく。薄暗い土間の中央の大釜から盛んに湯氣を吐いて、ドキヨは煮立つ。職人は棒で釜の中を掻廻してゐる。けれど惡臭に堪へないで、私はすぐ外に出たい。

山腹の小徑を池畔へ下る。

環座の山々は四周から押迫つて、赤松の純林の頂は容易に仰がれない。遠い際から、がうと寄せて、とうと返す峯の松風は魂の底を洗つて、永遠の響に通ふ。長い尾を曳いて、何處とも知れぬ天の一角から笛のやうに鳶の聲が流れてくる、と耳がなくなるほどの靜けさ。何だか心が細々としてくる。

足もとのあけぼの草は其昔犯したさゝやかな罪を白綠の小花に生涯懺悔してゐるやうだ。岸邊の雌竹、蘆、荻などの叢林は折々吐息を洩す。

私は朝な、朝なニンフとなつて、自から定めて、かたくなに守つて來た日課の水浴をこの湖でしたならば……と、水を掬んで見たが案外冷たくない。

池は今、餘程水が減つてゐると見えて、汀から數歩のところ水の描いた曲線の雲形に出入するあたりを辿りながら、私は向ふ側に出た。小松林の丘陵を登り切ると、ぱつと目を射る落葉松の林は黄葉にはまだ少し早いのを斜に差込む日の洪水に照りのある金茶色を見事に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

染め出してゐる。林の奥まで明るく透いて餌を捜し歩く山鳩の影がはつきり見える。

　孤獨そのもの丶やうに無心の心の底から響く山鳩の聲。やがて栢の大木に飛んだ時は二羽だつた。あの大木の幹の縦皺は自然と戰ふ生の辛苦を刻んだのであらう。

私は樹蔭に座を設けた。時計の磁石が指す東の方、丁度向ふの赤松林の緩い斜線が兩方から落ち合ふあたりに相對して、座を設けた。

　在昔、世尊は王舍城の韋提希夫人に西方に向つて正座し、半眼にして、落日を凝視せよと訓へられたとか、けれど私は落日を愛すると共に、否、それよりも曉を、日出を愛する。水浴し果てた後、東天の太陽と合する私はこの身ながら、六合を貫く主宰者ではないか。

　ナイフで刈つた母子草や、蓬、根笹などを其儘敷物として横へた半疊たらずの座の中にぽつと座つて、萬象に耳傾けてゐると、私は頻りに青空を屋根とする戸外生活がして見たくなつて來た。

　ふと思出されるのは、まだ小娘の頃、兩親と避暑してゐた或海岸地の松林の中に一輛の車を家として暮してゐた盲目の按摩父子のことである。彼等になくてならぬだけの家具一式は車の中に置いてあつた。勿論ふたりは其中に寢る。炊事は野天でしてゐた。土地での仕事が思はしくなくなると、目明きの息子は盲目の父を車に乘せて家共に引いて旅に立つ。二週間、三週間と經つと多少の銅貨をもつて、歸つてくる。私は此簡易な車上生活、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

無雜作な無錢旅行を幼な心に面白く思つた。不思議にさうした生活に對する憧れの心は歸京後、いつまでも失せなかつた。

　この山間の池畔の松林の神厳な呼吸の中に同化して、刹那々々にぐらつく人間のくだらない、頼りない希望や、幸福を一切捨て果てゝ大自然のやうに純一に、剛健に生きられたならば……私はこの世に生れて多くの經驗を得やうとは夢更ら願はない。が、只人生の精髓だけ味ひたい。それで十分である。私をして泳ぎ手となすなかれ、地の底に潜らしめよ、天の奥に分け入らしめよ、そして、そこに自然と共に當に大實在であらしめよ。

　目の前をミクロコスモスの秘密の美かと無色透明の小さな珠が、青空を背景に小紋更沙のやうにいくつも／＼珠數繫ぎになつて下へ、下へと降りて行く。かと思ふと銀砂のやうな無數の光體は光線の縞目に浮ぶ塵埃のやうに右往左往に飛びかふ。

　人影が次第に大きくなつて來た。けどんな顔付でソクラティスそつくりな鼻の百姓爺が私の前に立つた。今日の小春日和を松葉掻きに來たのであらう、大きな籠を背負つてゐる。

「どつから來ただい。おめえ樣。」

　咎めるやうな挨拶だ。

「私、そこから……」

「村の者ぢやあるまい。」

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「養鯉所にゐるのさ。」
「へえ――」長く引張つて「おめえ様が。」と私の袴姿を熟々見る。
「××の小學校の先生様かい。」
合點らしく獨り言を云つた。
「おら、畠の方、えらい忙しかつたもんたて、御無沙汰してゐるが、旦那によろしく云つておくり。おら〇〇だんね、葡萄畑の。」
葡萄畑と言つた言葉にそゝのかされて、暫くしてから爺の後を、落葉松林を拔けて峠の方へと行つた。
坂を登るにつれて、飛彈山脈は最高峯の頂から次第々々に覗き出して、薄すらと群る水蒸氣の帶のかなた、松本平を隔てゝ遠く、しかも眼の前に現れてくる。今朝のあの荒くれた褶襞も灰紫に包まれてこまやかに、ゆるやかに、物柔かい。
金覆輪の雲をわけて、靜かに沈む夕陽は空線間近に燒付いてくる〳〵と廻轉してゐる。
あゝ日沒だ。だが、この近よることも出來ないやうな高熱に爛れながら、それてゐて、觸れてみると案外ひいやりとしてゐさうな、血色の、はては陰慘な氣さへ漂はす大圓は何ものだらう。
大圓は紫の山に呑み盡された。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雨のやうに、半天かけて、光線は、幅廣の帶のやうに雲を透して四方に放射するかと、見る間にかはる火の大海、忽ち高く懸る東天の雲悉くに反射した。

打寄せる焔の波は紅に峯々を洗つて、磨きすました雪の脈管に血潮を流した。家の棟高く振りかざされた纒のやうな噴烟よ。今日といふ全きひと日の臨終を祝福して天地萬物は今、上氣したのだ。

一時かつと燃え上つた火の海も次第に和んで行く。

ルビーを解して湛へたやうに深みがあつて、しかも底の澄んだ紅に、はては落ち付いた赤錆色にしづみ渡つて、大山脈のかなた遠く、遠く。果てもなく續く。

片々として金茶色にちらばる雲は浮島か。大きな深い灣を抱く雲の岬は方々から巨大な手足をさし伸して其奥にも、又其奥にもいくつかの灣が見出されさう。金波は岸に碎けてゐる。

あゝ、山の向ふには、海の向ふにはどんな國があるのだらう。飛彈の國！飛彈と云ふ國はどんな國だらう。どんな人が住んでゐるのだらう。屹度太古の森の中で、神の人が慇みにいちひ細工をこしらへて暮してゐるに相違ない。

山岳はいつか紫の色を増した。暮れ行く花崗の山の振袖の樣な濃紫の色——こんな優艶な色がこの世にあらうとは。殘んの光りは幻のやうに山の面を滑つて、谿々に夢を孕んだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

刻々に移る山の色、空の色――色彩の變化が奏でる宇宙の音樂に私は恍惚として、瞬もなく峠の頂に佇んでゐた。

冷たい風が髮を吹く。

喪神した人のやうにもと來た路に引返した時は空は一樣の薄暮色に消え果てゝ、暗藍に横たふ連嶺は魔王の寢姿のやうに默然として動かない。いつ迄も焦茶色に殘つてゐた一抹の水蒸氣も灰色の中に吸ひとられた。空から覗きだした白い星の光が寒さうな。

近くの禿山は一段と褐色に、燒き拔いたやうに輪廓がくつきりと見えた。

急ぎ足に池畔の丘陵まで來ると、火事か、山燒きか、東の山の端、松林のかげが明るくなつて、梢頭は陰森のやうに黑くすく。あゝ月だ。遠い國から今、月が昇るのだ。

あたりはもう暗い。萎れた花芒がほの白く暮れ殘るばかり。

漂泊のおもひが泌々と胸に迫つて來る。

圍爐裏の周圍は賑やかである。

大きな汁鍋から立ちのぼる湯氣の中で、一日の勞働を終へた若者達の横顔は火に燃えてゐる。

女中達は無遠慮な高笑を折々投げる。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私の部屋には置火燵がしてあつた。其上にお膳が上つてゐる。鯉の煮たのに、鰻のお汁だ脂肪(あぶら)て唇がいつ迄もぬるぬるする。

私は悲しい小ランプに暗く照されて、屏風の中に、ぢつと座つてゐると、盗人のやうに、障子の破れから黒猫が忍び込んで、私の側に蹲まる、眼ばかり燐のやうに黒暗(くらやみ)に光つてゐる。追つても、追つてもいつの間にか又抜き足にはいつて來て、私の影の中に蹲まる。

ふたりの黒い影は重り合つて久しく動かなかつた。夜は更けて行く。

一頻り花が咲いた露骨な色話や、戰地での手柄話も圍爐裏の火と消えて、夜は次第に更けて行く。

庭の小池で鯉が折々跳ねる。

山國の秋の夜はまるで冬だ。もう凩が家をめぐつて、森に鳴つてゐる。

——完——

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一夜

物集和子

十一月末の旅は淋しいものだつた。馬關を六時何時分發の神戸行に乘つたお秋は、二等室の隅の方に、其の疲れた頭と體とを、絹ラッコを敷いた上にのせて、窓に身を寄せかけてゐた。車內の乘客は、大阪の商人らしい人が自分の前に腰掛けてゐるのと、新婚らしい人が廣く場を取つて、袋から蜜柑や林檎を出しては無遠慮に食べ乍ら、意氣作りなお秋を時々見て居る外は、銀行の頭取とも云いたい、五十格好の人が軍人を對手に時々話しをしてゐる許りだつた。

手荷物を傍へ置いて、兩手を謹ましく膝に組んだ儘、紺のスカーフで深く顋迄埋めてゐた。羞恥と慚愧と――お秋の頭の中ではくる／＼と渦を巻いた。闇を只一直線に物凄い音して走る車に連れて、微かに搖れる體は、心地よく眠を誘つて、頭から微溫湯でも浴せられたやうな、凡ての感覺が鈍つた。此の儘何處迄走る事だらう。燈火が僅かしかない淋しい驛を過ぎて、又元の闇に入る。硝子へピッタリ貌を押付けて覗いて見たが、只暗かつた。

吃驚りした時のやうに、急にハッとなつて、四邊を見廻した。明晰した氣持に歸る。すると何となく張合も何も無くなつて了つたやうな、味氣ない心で、若い二人の樂しそうに笑ふのを見てゐた。わざと掛けた色眼鏡で、人には分らなくとも、恐らく其の人達を羨む心は、目にも貌にも現はれて居た事だらう。泣きたいにも自由に泣けない、傍の人が邪魔になつた。昨夜の今は、丁度田舍芝居を見てゐたのだと、幾等消さうとしても、昨夜の自分の憐れな姿がありありと目に浮ぶ。

奈何云ふ考へで彼の人に逢ふ心になつたらう。一寸した好奇心——機み、とも云へやう。旅の淋しさの遣瀨なさからとも云へる。何の爲めに逢ふ。二年の間に手紙さへ取りやりせぬ中に、逢つて何の事があらう、とは云へ自分は飽く迄逢つて見たい願だつた。

その人から敎へられた一里程離れた小さな町の、名指された旅館へ着いて、夕かた、持重りのするやうな着心のいゝ棒縞のお召に、同じ物の羽織を着て、髮は田舍では奈うせ難しい自分に氣に入る譯はないと諦めて、洗髮のハイカラにしたのが妙に似合つて、素貌と思はれる程な薄化粧で鏡に向つた時は、之を二十七とは誰が見やう、絹の重みで自然と撫肩になる肩の邊りから、立つた折の後姿迄映して、何日迄も飽なかつた。車が來たと云はれて漸つと鏡の傍を離れたが、幾度か見返りみかへりした。凹凸のある、坂の多い、石塊道

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をゴム輪でない車の音に何だか氣がひけ乍ら、十分程すると町外れになる永樂家と云ふ茶屋についた。來て居るかを危び乍らも、思ひ切つてもう閉めてあるくゞりの戸を開けると、「お出でなさいませ」と女中に何も彼も呑込んだやうな挨拶をされて、馴れてはゐるものゝカッとした。

「もう彼入つて」

「ハア先程から」と言葉少なに冬も雨戸を閉てないと云ふ坐敷の前の長い椽側を、草履でヤケに音をさして先に立つた。飛石や一寸した植込が外れの部屋から流れる薄灯に、その一廓丈が浮き出てゐた。外の風に冷え切つた椽側は、歩く度びに足袋の裏迄冷りと感じさせる、何となく霜夜と思はせる晩だつた。

「サア何卒」と女中は人らずに身を引いた。今更らよせばよかつたと云ふ後れも出たが、それでも思ひ切つてツイと中へ入ると、丸て後ろを向いて障子を丁寧に閉めて、振り向くと男と丁度貌を見合せて、

「久濶」と淑かに頭を下げた。

「御無沙汰をしつ了いました、ツイ旨く書けないもんですから、始終お噂は家でしてるんですけれども、後れが出てねえ」と不意に逢ふのを斯うして如何にも思つて居たやうに見せかけたが、男が無言つて自分の貌を見てゐるので一寸照れて。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「大變に待つて被下すつたの」と胡麻化しに云つて持つてた手帕を揉みくちやにした。

「何有に其樣でもないさ、寒いからズッと此方へ寄つたらいゝぢやないか」と落着いた物言ひで、吸つてた莨を前の火鉢にさして、腕組をした。

「奈うして國へ歸る事になつたの」と切り出されて、漸つと話の緒口が見付つたと。

「お母さんが死くなりましたから」とスラ／＼と云つた。

「よく病氣だから困るつて云つてたつけね」

「否え彼れは小母さんよ、お母さんは年中ピンピンしてましたわ、それが急でね、眞の二三日しか病はないんですよ、家には私の末の妹と二人限でせう。悪いつて電報を受取つた時は丁度宴會のある日で奈何しても手が拔けないから其の翌日に朝の一番で新橋を立つたんでしたけれどももう無効でしたわ、最も電報を受取る直ぐに行つた處で無効は無効なんだけども、でも其方が思ひ切りがよくつてね。だから私が歸ると親類中してお通夜をしてましたつけ、妹が一人でうろ／＼してゝ可愛想だつたわ、でももう何も彼も濟んで了いました」

「ぢやアもう此の儘國にゐて養子でもつて譯かい」

「豈夫、御笑談でせう、妹に許嫁がありますしお母さんの姉さんが妹を預かつて悉皆りやつて呉れるつてますから家は一時疊んで了つて、私しや元の家に歸つて前の通りなんてすわ。その代り妹には養子が出來てるし、もう心配無しの身の上になつたと云ふ譯なんてす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

よ」と强いて笑ひ乍ら云つたもの丶、男の顔に何處か自分を懷しむやうな、憐れむやうな色がと探したが、何處にもそれは見當らない程、落着いた、靜かな態度だつた。

二年前よりはずつと眞面目になつて、氣のせいか大變に老けて見える。奈うやら別の人に逢つたやうで、拍子拔がして、云はふと思つた言葉も張合がなく、無言つて手持無沙汰にその身なりなどを見てゐた。手紙の端に、ついでながら小生も彌々此度結婚致し候と何氣なくかいた文句が頭を離れない。大方其樣事だらうとは當りをつけてゐたもの丶、言葉丈の約束でも、自分は空賴みと知り乍らも的にしてゐた、何日か奧樣と呼ばれる身になれない事もあるまいと考へても居たが、何も彼も打捨つて了いたいやうな、話をするでもないと、味氣ない思ひがした。

「奧樣をお貰ひになつたんですつてね、お目出度う御座います、何方から、何とも仰在らなかつたから私しや初は嘘かと思つたんですよ、昇がれたのかとも考へたんですけれども、豈夫ねえ」とそれでも未練らしい云ひ方をした。

「笑談ぢやないさ、餘程知らせやうと思つたんだけれども何日かお前に知らせる人があるだらふからそれ迄と思つて默つてたのさ、又知らした處で」と途斷らしてまじ〳〵顔を見てゐるのを被せるやうに、

「知らした處で奈何なの」と云つた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「仕方がないぢやないか」と詮事無しに苦笑した。お秋も一緒に苦笑ひしない譯には行かなかつた。お嫁さんの事を聞きたいと思ひ乍らも、嫉くやうに思はれても厭だと、其儘押無言つた。這麼空な事を云ふ爲めに故々此處迄來たのかと馬鹿〳〵しい。止せばよかつたと云ふ言葉が頭の中で盛んに燃えた。自分の殊更ら笑顔の多い狎々しい調子に引替へて、男は其處に幾つかの溝を作つてゐるやうな物言ひをしてゐる。之ではもう三年五年と經つた後では、路傍の人としか――それよりも、逢い度くない人として二人は見合はなければならないのだらうと淺間しい氣がした。何日迄經つても何方からも物を云ひ出さない、お秋は少しズリ寄つて、火箸を持つた手で炭に男の名を書いては消し〳〵してゐたが、それも何だか故意と初心らしく作つてゐるやうで、堪らなかつたからよして火許り見詰めてゐた。而して順々に行儀好く並べられる敷島の吸殼を數へたりしてゐた。

「寒いこと、今夜は莫迦に冷えますね」

「此處等は雨戸を閉めないから餘計寒いんだらう」

「さうですつてね、何ぼ用心がいゝつても這麼に寒ければ閉てたらよさゝうなものだのに正直ね」と譯も無く笑つた、強いて笑つた貌は後からスッと笑が引込んで、叉元の詰らなさうな貌になる。

「斯うやつてちや何だか拍子が拔けて可笑しいぢやありませんか、芝居にでも行つてみま

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うか」
「あるかしらん」と首を捻るのを引取つて、
「あるんでせう、今日町ン中を拍子木か何か叩いて廻つてましたよ、其處等中の人がぞろぞろ來てみてましたもの、まア行てみませうよ」と云ふと氣早に立上つた。斯うやつてゐるよりはまだいゝ、此儘何時迄坐つてゐた處で照れる許りだし、之て歸るにしては餘り馬鹿げてゝ人にも云へないからせめて芝居にもと考へて、男が餘り進まないのを無理にも連れて行かふとした。
「穢いぜ、吃驚りしないがいゝ」と男は笑ひ乍ら立つて、外套と帽子とを持つた。
まだ八時と云ふにもうこの町は何處の戸も閉て切つて、軒灯の少ない、ともすれば石に蹴きそうな道を、宿の女中が毛布と草履と提灯を持つて先に立つた。坂を一つ上るとその衝き當りの呉服や丈がまだ店を開けてゐて、硝子戸の內は、明かい電灯の元に、紅や青の多い友禪がこの町の若い女達の胸をそゝるやうに飾り立てられてあつた。女中を先にお秋は男に倚り添つて歩いた。口許迄蔽つたスカーフは熱い息にぬれて、冷たくなつた。霜に凍た道は、女中の日和下駄で眺ね返るやうな音がする。不意と此の時お秋はやよひへ始終來る銀行家の若旦那と、小まんと云ふ雛妓との戀仲を思つてゐた。若旦那の纖細な色白な貌と情の深かさうな目と、小まんの結綿に掛けた紅い鹿の子や、友禪の長い袂や、若い、心中も

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

仕兼ねないやうな二人の事を泌々考へた。これが緣を引くやうに自分と男との二年前も、小まんに劣らない深いものだつたと、段々後へ〱と考へが手繰られて來た。彼の時の情に燃えるやうな目や優しい口吻は、奈處を奈何探したら得られやう、果てしもない思ひから泪は止度なく頰を傳はつた。が急いて氣取られないやうに拭いた、男の步く度びに外套を捌く音がシユウツ〱と鳴る。

二階立の家の障子が開いてゝ人が立つてゐるやうだつたら、女中は下から、

「お婆ア、お寒いなア」と怒鳴つた。

「お豊さんかい」と云ふと間も無く降りて來て、馳け出して女中と何か小聲で話し乍ら、四五間先の幟が二三本夜風にはためいてゐる芝居小舍の前へ出た。木戶の前には紙に大きく、忠臣藏大序より討入りまで、と書いてある。穢らしい人が出たり入つたりしてゐた。婆さんが先へ入つて、足袋や何かゞ汚れると云つて、揃へてくれた草履を突掛けて後へ續いた。粗末な棧敷に持つて來た毛布を敷いて、火鉢を持つて來るやらしたが、軈て女中は婆さんに賴んで歸つて行つた。舞臺では今判官樣の切腹の場だつた、男女とも正直に舞臺に心を引かれてゐた。汚らしい、二寸程下の開いてる、その土地の魚屋だの小間物やの名が細かく並んだ幕が引かれると、ほつとしたやうに四邊を見廻した。二人の少し先に藝妓と半玉が五人程來てゐたが、その一人が男を見付けてお低頭をすると、後の皆んなも云ひ合せ

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たやうに此方を向いて笑ひ乍ら頭を下げた。
「藝妓衆ね」と分り切つてゐながらも聞いてみた。
「あ丶、あの此方を向いて笑つてる、今頭へ手をやつた、あの妓が豆蝶つて此土地で一番好いんだ、鼓が上手でね」としきりに云つて居たが、お秋には只の田舍の藝妓としか見えない、その妙に上方言葉を使ふのもイヤだつた。幕間には今迄土間で見物してゐた人が立つて、飴やおこしを賣つて歩いた。その婆さんは蜜柑とおせんを持つて來た。外から吹込む風は寒いし、花道や其處らを歩く人が、幕が開いても引込むぢやなし、お秋は芝居を見てゐるより、斯うして男の傍にゐると云ふ考へ許りしかなかつた。蜜柑をむいてソッと男の膝の上にのせて、自分も大分は下を向いて食べるか、煙草を吸ふかしてゐた。
「一向芝居は見ないぢやないか、歸らふか」
「い丶ぢやありませんか見ないだつて、只斯うやつて座つてる丈でも陽氣で好うござんすわ」と云つて歸らふとは云はなかつた、斯うやつて時間の經つのを默つて見てゐたい。男も無言つて舞臺の方を見てゐたが、軈て時計をソッと出すと。
「歸らう」と立つた。
「さう」とお秋も素直に從いて、お婆さんに毛布を賴んで外へ出た。夜風は莫迦に冷たく貌に當る。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「提灯を借りてからうか」

「何故、好いぢやありませんか」と素氣なく云つて暗い道をつまづき〳〵歩いた。お酒が呑みたい。

「やよひも變つたらうね」と久潤くしてから男が聞いた。

「えゝ、悉皆り人は變つ了いました」

「黑田君のは奈何したらう、お藤とか云つたね、あの女は」

「お藤さんはもう疾つくに彼處を止してときわの方へ行つ了いました。それに黑田さんも何處かのお孃さんと御婚禮なさつたし、お藤さんは貴方長く病つてたんですよ」と氣の無い云ひ方をしてゐる。お藤のやつれた貌から、女中頭の慾一天張りな、ガミ〳〵云ふ淺間しい年老つた貌がお秋の目に消えたり浮んだりした。

何日となしに濃かつた思が、段々と薄絹を一枚一枚とはがして行くやうに冷めて行つたとは云へ、それでもお秋の目には只一人の男の顏しかなかつた。其の間に男には別な女の貌が何人あつたらう。藝妓——お酌——妻——先刻の豆蝶だつて、と思つてぢれ〳〵した。云ひ度い事の百も、憎まれ口の千も叩いて、男の慍つた貌を、冷やかに笑つてやりたいやうな氣持もした。もう此樣處には一分も居たくない、何なら今から汽車にでも乘りたいと考へた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「私之て歸ります」と永樂家の門の處で立止まつた。

「一寸上つてつたら奈何です」と義理に云つて、又時計を出して、

「九時半、僅た一時間しか見てなかつた」

「一時間見てれば澤山だ」と小聲で云つて、

「でも御目に蒐れてようござんした、之でお暇致しませう」

「ぢやア車を呼ぶから」

「否え澤山、一人だつて奈何にか行ます」

「笑談ぢやない」と男は仕方なしに笑つた。

車の來る間、男は妙にそは〳〵してゐた、お秋も俯向いてみたり、それは間が拔けて極の惡そうな、成可く男と貌を合さないやうにしてゐたが、歸らふと云ふ時、男は紙包を何とも云はずにお秋の手に渡した、餘程押返さうとしたが、男の貌を見て之も無言の儘輕く會釋したなりで受取つた。而してこんなものと云ふ風に、氣にも懸けずに帶の間に入れた。車に搖られてゐる內は何に疲れたともなしに夢心地でゐたが、宿に歸つて一人になると、明らさまに今日の自分の間が拔けた役を見出したやうで恥かしい、何故自分から進んで彼樣事をしたのだらう、男の心にはもう疾うの昔しに自分と云ふものは消え去つたのに、今更らそれを取り戻したいやうに、種々物を云つたりしたりした自分が淺間しい、お金を取

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るまいとした時に不安な表情をした貌から、お金を受取つたらホッとしたやうな様子迄見逃さなかつたお秋は、男がもう之で縁が切れたと悦こんでゐるのだらう、と憎らしい、斯うしてお金で縁を切つたり、繋いだりするやうに思はれるのが口惜しい、

此處迄辿りついた時に、もうその事は考へるのも厭になつた、何も昨夜の夢と忘れやう、早く東京へ歸りたい、久濶く三味線にも太鼓の音にも逢はないやうで淋しい、早く歸つてあの急がしい夕方から夜へかけて、藝妓にさへ羨まれる意氣な姿で如才なく客を取りなそう、大勢のお客でも歸つた後は、餘計寂然(ひつそり)して了つたやうな氣持になつて、二階の欄干に凭たれてゐると、よく柳のさはりなどを彈いて來るのが、遠から遠くへ迄殘つて、目の下の河水にもその響きが何日迄も〳〵殘つてゐるやうに、落ちかゝつた二十日位な月の樺色のやうに濃いのが、キラ〳〵と水に映るのを眺めては、今歸つて行つたお客の噂をよくしたものだと、もうやよひの事ばかりが胸にあつた。と、今迄開けても見なかつた紙包を開いて、お召が一重ね出來ると一寸胸算用をしてみた。今朝出る時は寢不足で貌が莫迦に蒼かつたがと、窓硝子に映る横貌をみた。何日か其の儘窓に凭れて、薄明い、尾の道を呼ぶ頃ろはまだ夢の中にゐた。

――完――

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

冬籠

白雨

座せば足袋脱がん癖あり冬籠る

冬を爐に籠れば疎き艶話など

國寒し腹中の計半ば就る

木枯の大野吹きぬくや戻り獵

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雪に逢ふ笑話の餘暇を稿つゞる

物いみて早寢せし旅雪に來て

雪嶺に土踏まぬ雷鳥と我と太陽と

熊追ふて深く入る山雪女

吹雪野に上﨟一人遲歩の難

野戰幾日雪に烽火のこゝかしむ

瀧に來て雪踏むも奥や山は紅葉す

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

黑猫

ポオ

今、筆を執らうとしてゐるのは最も荒唐不稽な物語であつて人から信じられやうとも思つて居なければ、また信じられるとも思つてゐるない。自分自身さへ信用の出來ないものを人に求めるのは狂氣の沙汰であらう。もとより自分は發狂してゐるのでもなければ、夢を見てゐるのでもない。たゞ私は明日死ぬにのぞんで、今日この精神上の重荷をおろしたいと思ふところから、事の成行を簡單、明瞭に修飾なく、單に家庭內の出來事として世間に發表しやうとするのである。この出來事は自分に非常な恐怖や苦痛を與へ、自分といふものは全々破壞された。しかも猶自分はこの事件の解決を試みやうとはしない。これは自分にとつては胴震ひする程のことであつたが、大方の人々には barrogues よりか怖くない位なものであらう。恐らく今後見出される智力に依りて、この幻想と尋常茶飯事に引下げられるのであらう――もつと冷靜な、もつと論理的な智力に依つて、今自分が非常な恐怖の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

念をもつて書くところもほんの有觸れた必然の原因結果に外ならないと認められることであらう。

私は幼少の時から順良で、慈悲深い性質であつた。心の優しさと云つたら仲間から揶揄れる程で、殊に動物が好きであつた。兩親から貰つた種々の種類の家畜と一所に一日遊び暮して、食物をやつたり、世話をしたりする時程樂しい時はなかつた。この性癖は年と共に進んで、成長の後迄も重な快樂の源泉の一つとなつてゐた。曾て忠實な、怜悧な丈を可愛がつたほどの人には、かうして得た滿足のどんなものであるかは說明する必要がない。動物の無我な犧牲的の愛情は、只人間の浮薄な貞節、賤しい友情を何度か味はされた人の心には泌々と感じられるものである。私は若くして結婚したが、幸にも、妻は私と性質を同じうしてゐた。私の家畜を愛する性癖を知つて妻も又出來る丈の親切を盡した。ふたりは鳥や、金魚や、犬や、兎や、小猿や、猫を持つてゐた。特に猫は大きな純粹の黑色が美しい上に驚かれる程利巧であつた。其智惠に就て語る時、妻は御幣かつぎの氣は微塵もないのだが、あらゆる黑猫を巫女の化けたのだと見做した古代一般人の意見をよく喩へに引きくした。

私の愛物であり、遊仲間であるプルートー(猫の名だ)は私獨りで飼養つた。何處でも私の行く處には跟いて來るのだから、市街を一人で歩かうと思へば容易のことではなかつた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

併しこんな風で我々の友情は終りを告げた。言ふも恥づかしい次第だが、自分は不節制な惡魔に誘はれたのか、平生の氣質、性格は一變して、日増しに我儘に怒り易くなり、人の感情などは少しも思はず、妻に對してさへ、放言し、終には暴力迄加へた。勿論寵愛してゐた動物は皆自分の性質の一變した事に氣附いたであらう　自分は其等を大事にしなかつた許りか、隨分虐待した。兎や猿はもとより犬でさへ私を慕つて、或は偶然に側に來ることがあると、何の用捨もなく虐待した。たゞプルートに對してばかりは十分愛情が殘つて居たところから、殘酷に取扱はないやうに注意してゐた。私の病は益々募つて終りにはプルートでさへも――尤もプルートも年とつて多少怒り易くはなつてゐたのだが――私の癇癪を經驗するやうになつた。

ある夜、町中を彷徨ひ、大醉して歸ると猫が自分の目前を避けたやうに思つたので直樣引捕へた。餘りに狂暴な擧動に驚いたのか、其時猫は私の手を齒んだ。傷は些少であつたが、忽ち烈火のやうに怒つた私は前後も覺えず、本來の精神は何處へ飛び去つたやら、惡魔より怖しい殘忍、惡虐の念は滿身の筋、悉くを震はした。私は胴着の隱しから小刀を取出し開くが早いか獸の咽喉笛を掴み、狙ひを定めて、眼球を一つぐいぐいざと刳り出した――あゝこの憎む可き殘忍の所業を筆にする時、私の身は慚愧に燒かれ、身内は戰慄する。

朝になつて本心に返つた時、夜の間の亂飲のほむらを眠り拂ふた時、自分は罪を犯したと

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

云ふ半ば恐れの、半ば悔恨の情を覺えた。が、それもつまりは薄弱な曖昧な感じで自分の心には觸れてゐなかつた。私は再び放逸に流れ、仕事で儲けた金を直ぐ悉皆酒にして了つた。兎角する内に猫も漸々癒つて、失明した眼の窩みも出て來、外見は誠に恐ろしいやうであるけれども、彼自身に最早や左程の苦痛を感じないやうに見えた。通常の樣に家の廻りを歩いてゐたが、勿論私の近寄るのをひどく恐れて逃げてゐた。一度は非常に私を愛してゐた獸に斯んな忌しい事をして憂き目を見せたので私は今迄の心持を棄てた。而してこの感じは軈て激怒に代つて、丁度挽回する事の出來ない最終の滅亡に至るやうに邪惡の心が起つて來た。この心に就ては哲學も決して何等の説明もしない。しかも自分は邪惡が人間の心の原始的衝動の一つ、即ち人の性格を導く分解することも出來ない第一の能力、若くは情感の一つであると信ずるよりも、私の靈魂の生存の方がもつと疑はしい。

自分が惡い事をした覺えがないからと云ふそれだけの理由で幾度もかく厭はしい又愚かしい罪を犯して、誰も自ら氣が付かなかつたのであらうか。我々は單に斯うなるだらうと云ふ事が解るので自己の意見に逆ふても法律を犯すと云ふ傾向を常に有たないであらうか。此邪惡の心が遂に私を滅するやうになつた。――我が精神自らを困らせ、その性質を攻擊し、單に惡の爲めに惡を爲す事を限りなく熱望してゐた。その心は遂に罪もない畜生に引續き害を加へて其上句には殺して了ふやうにまで私をさせた。或る朝私は冷たい心で猫の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

頸の廻りに輪索を篏めて木の枝に懸けた。私は雙眼から泪を流し、この上もない慘ましい、悔の心を感じながら懸けた。斯うすれば罪――若しそんな事が出來得べき事であるならば最も慈悲深く最も惟敬すべき神の限りなき惠みの至らない彼方へ、自分の不朽の靈魂を危害にさらすやうな許しがたき罪――を犯してゐるのだと云ふ事を知つたから懸けた。

此の殘忍な所業をした夜、私は「火事だ！」と云ふ叫聲に驚いて眼醒めた。寢室の窓掛は燃えて家中が焰になつてゐた。私始め妻も女中も火の中から逃げ出るのは容易なことでなかつた。破滅と云はうか、此の世に於ける私の富は全部呑み盡されて了つた。私が絶望に陷つたのは其時からである。私はあの殘忍な所業とこの災難との間に存する原因結果の關係を確めやうとする氣もない位に弱つてはゐたが、事實を次から次へと詳細に說いて、あつた事ならたとひ些少な事でも宜い加減にして置く事は好まない。火事の翌日私は燒跡を見に行つた。壁は皆落ちて了つてゐたが。唯一つ丈殘つてゐた。それは家の殆んど眞中にある餘り厚くない隔ての壁で、今迄私が寢てゐた寢臺のまうえだ。塗壁は此處で極力火に抵抗したのである。そのぐるりに人だかりがして口々に、「不思議だ」「奇怪だ」と云ひながら壁の一部をとみかうみ熱心に見詰てゐるので、自分も好奇心に馳られて近よつて見ると何とした事か、白壁の只中に、丁度浮彫のやうにあの大猫の姿が歷々と倂も大きく現れて首の廻りには繩さへついた儘だ。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

初て此の幻像を見た時は勿論これを些細な事とも思はれぬので、自分は一方ならず驚きもし、怖れもしたが、種々考へた末漸く心を落着けた。猫を掛けて置いたのは家の側の庭であつたから、火事の騒動に人が寄り集り、その内の誰かゞ寐てゐる自分を起さうと、木に掛けてあつた繩を切りはなし、開けはなつた窓から自分の室の中に投げ入れたのに相違ない。私の殘虐の生贄は、他の壁が燒け落た時、何かの拍子で新しく塗つた壁の中に這入り、焰々たる猛火と死骸から發するアンモニヤの爲に石炭質が今見たやうな怪しい像を造へ上げたのだ。と　斯う容易く理屈はつけたものゝ、心からさう思つたのでないから、此の驚く可き事實は自分の想像に深い印象を與へて、其後數ヶ月間と云ふものは絶えず猫の亡靈に惱された。その頃若干優しい心が自分に立ち歸つたやうな氣がしたが、と云つて後悔の念ではなかつた。私は猫の失はれたのを悲しみ、何處か似通つた顔のがあれば代りに欲しいと、其頃通ひ馴てゐた魔窟へ捜しに行つた。

一夜穢しい魔窟に半醉ひ心地に座つてゐると、ふとこの室の主用品となつてゐるジンやラムの大酒樽の上に何か黒いものゝあるのに氣づいた。暫く其所をじつと見詰て居ると、驚いたてはないか、早や其處に居ない。で私は側に行つて觸つてみる、と黒猫だつた——丁度プルート位な、全く大きな黒猫で、よく似て居たが、只一つ違ふのはプルートは白い斑と云つては少しも無かつたのに、これは形にこそまとまつて居ないが、殆ど腹部全體に

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

白い斑點があつた。

撫てゝやると直ぐ立ち上つて高い聲てゴロ〳〵唸り乍ら私の手に身體を擦りつけて、氣嫌かれたのを喜ぶやうな様子てあつた。これこそ自分が尋ねて居たものだから直ぐ主人に賣つてくれと頼むだが、別に金を望むてもなく、こんなものは一向知らなかつた、以前見たこともないと云ふやうなことてあつた。

て可愛がりながら、自分が歸へる仕度をしてゐると猫も一處に行きたいやうな様子をするので、爲たい儘にさせておいた。歸へつてからも直ぐ家に馴れて、妻の大變な氣に入りとなつた。

が豫想に反して、私はすぐそれを嫌ふやうになつた。何うしてゝあるか、又何故さうてあるか解らないが、自分に對する猫の愛情を寧ろ厭はしく、煩はしく思つた　この念は次第に長じ、はては苦々しい憎惡の情となつて、成可く逢ぬやうに努めてゐた。性多少自分の心に恥ぢる處から、又以前の殘忍な所業を悔ゆる處から、肉體的の迫害は加へなかつた。幾週間の間は暴力も加へず、烈しい虐待もせなかつたが、次第に——極めて次第に云ひやうもない程憎さが增し、丁度疫病の毒身に觸れるやうな氣がするので、强めてその煩はしい姿から避けてゐた。

この猫を一層憎むやうになつたのは家に連れて歸つた翌朝のこと、プルート同様に一眼

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

が潰れてゐるのを見つけたからであつた。然し妻はこれが爲猶一層この猫を可愛がつた。妻は前にも言つた通り非常に情け深い性質であつたが、これは以前私の性質で、あらゆる單純な純潔な快樂の源泉であつたのだ。

かく猫を憎むにも拘ず、猫の自分に對する愛情は增して、諸君にも解させることが出來ない程うるさく附纏ひ、坐れば椅子の下に這込つたり、膝の上に飛び上つてうるさく甘へたり、立ち上つて歩かうとすれば、足に絡み附くので轉ばされさうになる。長い銳い爪を着物に引かけて胸に迄かき上ることもある。こんな時には一と打ちに打殺したいと思ふけれど、以前の行爲を思ひ出すのと、全く白狀すればその猫が怖くて堪らないのが主な原因でさうも出來なかつた。

この恐怖は別に肉體的の罪惡から起る恐怖ではなかつた。と云つて說明することもないが私はかやうな大罪を犯しながらも言ふことを恥ぢるが、猫が私をか程に恐れさせまた私の心を動したのはたゞ一つの幻想に過ぎないことは明白である。妻は一度ならず、以前に私が言つた腹部の白毛に就いて注意を與へた。その白毛こそはこの怪獸と以前私が殺したものとのたゞ一つの相違點であつた。白毛は大きくはあつたが、其形は不定であつたことは讀者も記憶せらるゝことであらう。ところが次第に、殆ど解らぬ位の程度に何時とはなしに一種の形を現して來た。久しい間、私の理性はそれを妄想として氣にしまいと努めては

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

居たが——あゝ云ふだに私は戦慄する。この上の怕るべきこと、厭ふべきことがあらうか、あの忌はしい、物凄い絞架（クビリダイ）の形をしてゐるのだ——恐怖と罪悪と、苦痛と死の悲しい怖ろしい器械の形をしてゐるのだ。
て、私は殆ど人間の困苦を越えて苦悶した。あの殘忍な獸物——曾て私が其同類を殺したあの殘忍な獸物は尊き神の形に造られた人間のこの私に仇をするとは……何たる許し難い禍であらう。あゝ晝も夜も休まることのない私の心！　晝は絶間なく獸に纏ひ付かれ、夜は殆ど云ひやうもない惡夢に、何ものかあつて自分の顔に熱い怒氣を吹きかけ、胸は絶えず重いものに壓付けられ、振り落さうにも力が萎えて、幾度となく切ない寤覺めを味はふのであつた。

　こんな苦痛のため心中僅かに殘つてゐた正義の念も萎縮し、暗黒殘忍な惡心ばかりが唯一つのものとなり、あらゆる事物、あらゆる人類に對する憎惡の念ばかりが烈しくなつた。私は全く制御の力を失ひ、忽ち幾度となく、思ふ存分恐り狂ふので、愚痴一つ言はぬ妻は絶えず苦しみながら忍耐してゐた。

　或日、何か用があつて、當時貧乏のため除儀なく住んでゐた古い建物の地下室に妻と一所に行つた。猫も私に跟いて、梯子を下りて來た。其爲私は危く眞逆様に轉び落ちやうとしたところから、狂氣のやうに腹が立つた。これ迄子供らしい恐怖から、手を下さなかつ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たことも忘れ、斧を振上げ、只一と打ちに打ち殺さうと狙ひすました。ところが、妻に遮ぎられたので、悪魔のやうに怒り狂つた私は妻の手、振放すが早いか、微塵になれと彼女の脳顚目かけて打ちおろした。妻は聲も得立てず其處に倒れた。

此の怖ろしい虐殺を爲終へて、直ぐ私は種々考へた末死骸を隠すことに取かゝつた。晝にしろ夜中にしろ近所の者に見附けられないやうに、外に持ち出すことの出來ないのは解つてゐた。で、種々な事を計畫した。一度は死骸を細かに切り離して燒いて了はふかとも思つた。また地下室の床下に穴を堀つて埋めやうかとも思つた。或はまた庭の井戸の中に投げ込まうかとも、商品のやうに見せかけて、運び出さうかとも思つた、最後に中世紀の僧が彼等の生贄をしたと記されてあるやうに地下室の壁に塗り込まうと決心した。

斯う云ふ目的のために地下室は最も適當な場所であつた。と云ふのはその壁は無雜作の組立てゞあつて、近頃粗塗りしたばかり、大氣中に含む濕氣の爲にまだ乾かずにゐた。それに一方の壁に煙突まがいのものか、爐でゝもあるらしい、何か入つてゐる突き出た所があつて、丁度地下室の別室のやうになつてゐた。其處の煉瓦をとつて死骸を入れ、以前のやうに圍つておけば、誰の目にも不審を打たれることのないのは確かである。

この推量は間違つてゐなかつた。鐵挺の力でわけなく煉瓦を動かし、内側の壁に死骸を恐る〳〵立てかけ、位置を正すと、以前の通りに左程勞することもなく組み立てた。あり

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とあらゆる用心を出來るだけしてモルタルと砂と毛を混ぜて、私はもとのと寸分も違はぬ漆喰を作り、さて注意して煉瓦仕事に着手したが、造へ終つた時は自分乍ら何處として點の打ち處のないのに滿足した。壁は少しも動いた形跡は見えなかつたのである。

床に落ちた塵を奇麗に取り去り、得意に溢りを見廻して、まァ之でよかつたと獨語した。

次に私はこんな大不幸の原因である猫を殺さうと決心して探し廻つた、その時もし見付つたら屹度殺したに相違ないが、狡猾な獸は自分の劍幕に驚いて。逃げたのであつた。いつも胸に掻き上つて來たあの憎い獸が居なくなつたと云ふことは、筆にも想像も及ばぬ程の深い喜で救はれたやうな氣がした。夜中も姿を見せなかつたので、あの猫を此家に連れて來て以來初めて、心地易く熟睡した。心に殺人の重荷を負ひながらも熟眠した。

二三日經つても、猶私の苛責者は來なかつた。で、私は再び自由な人間らしく呼吸をしてゐた。怪物は恐れて永遠に屋内から逃げ去り、二度と再び見ることはないと思ふと私は此の上もない幸福を感じて、犯した大罪も左程自分の心を苦しめなかつた。四五の審問もあつたが難なく云つてのけた。一度捜索もされたが、勿論何にも發見せられなかつたので、自分の生涯は幸福なものと思つてゐた。

四日目に計らずも警官の一隊がドヤ〳〵と這入つて來て、再び嚴重な家宅捜索をした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とは云へ、隱した場處の思ひもよらないのに安心して私は少しも困らなかつた。警官は搜索するのに一處について來いと私に命じた。彼等は隅から隅まで殘りなく搜して、終に三四度目に地下室に下りて行つた。私は筋一つ動かさなかつた。心臟は無邪氣にまどろむ人のやうに靜かに、鼓動してゐた。地下室の中を彼方此方と腕組し乍ら靜かに步き廻つた。て警官も全く滿足して歸らうとした。自分は心中の喜びを禁ずる事が出來ず、只一言意氣揚々と述べて自分の無罪についての彼等の確信を更にたしかにしやうとばかり夢中になつた。警官が梯子を下りやうとした時、到頭私は云つた。

「諸君、私は、私に對する諸君の嫌疑の解けた事を喜び、此處に謹んで諸君の健康を祝ひ、尊敬を表します。時に諸君これは――この家は實に好く造られてあります。(何か穩かに言いたいとの物狂ほしい欲求から、私は何を言つたのか分らなかつた)「この壁は丈夫につぎ合してあります。」と得意になつて、持ち合せた杖で、丁度煉瓦仕事をした上のところを烈しく拍つた。我が胸に秘めた妻の死骸は其眞後に立てかけてあるのだ。

神よ、惡魔の爪より我身を救ひ、守らせ給へ！ 私の擊つた反響が消えるが早いか、墓の中から聲が應じた。その聲は初めは子供の啜泣のやうに低く、途絶れ〳〵に聞えたが、軈て長く、大きく連續する叫び聲に張り上げられて、全く異常な、殘忍な地獄の苛責に苦しむ亡者と、永劫の所罰に雀躍する惡魔の咽喉からもつれ乍らに、出て來たやうに、半は恐

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ろしいやうな、半は勝利を得たやうな怒號――慟哭であつた。

自分の恐怖は言語に絶えて氣絶せん許り、思はずたぢ〳〵と此方の壁迄よろめいた。梯子の上の警官等も暫時は恐ろしさの餘り、身動きもせず突立つてゐたが、應て、幾人かの逞しい手は壁を剝しにかゝつた。壁は容易に落ちた。もう大方腐れて血糊の凝つた死骸は衆人の面前に正しく現はれた。その頭上に、自分に殺人の大罪を犯させ、併も聲を上げて絞首吏に自分を渡したあの忌はしき獸は眞赤な口を大きく開いて、一眼を火のやうに凄く輝からせ乍ら、うづくまつてゐた。私は墓の中に怪物を塗り込んでゐたのである。

――完――

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

高窓の下

加藤みどり

お房は今迄井戸端で隣のお神さんを捕へて自分勝手な話ばかりして、相手が手桶を下げた儘去り兼ねて居るのにも氣付かず喋舌りちらして居たが、漸く話の切目を見つけて逃れるやうにして去つたお神さんの後姿を見送つて、殘り惜しさうにバケツを持つて歸つて來た。狹い露路（ろぢ）を身體を斜にして這入つて勝手にバケツをドンと置くと水が汚れた縞の前掛にかゝる、それも構はず破れた障子を外から締めて、玄關の格子を力一杯に音させて這入つた。下駄を脫ぎ捨てに、人一倍も大きな兩足に力を入れてヨイトコサと上に上つて六疊の小暗い座敷に這入つた。次の座敷との間の襖は堅く締められてある。左の高窓からと、玄關からと流れ込む光線もおぼつかなく、半古の疊と、敷紙を張つたやうな押入の唐紙とは一層此の室を陰氣にさせた。

お房は押入から大きな風呂敷包を出して、高窓の方へ向つて投げるやうにそれて置くと

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

同時に、大きな身體を疲れたやうに壁に投げかけて坐つた。暫く茫然と何を思ふてもなく窓の方を見ながら見苦しい取りたての珠子の質の明いやうな前齒をつゝいて居たが、軈て痛み出したかして、眉皺をよせて漸く口から指をとつて、風呂敷包を引きよせた、がそれでも直ぐ仕事にかゝらうとはしない。此の時誰も居ないらしく見えた隣の座敷でかすかに本のページをくる音がして、着物の摺れおふ氣配がしたと思ふと、お房は我に返つたらしく漸く包を開いて縫ひかけの羽織を出した。派手な大島絣は廣い膝を崩して座つた上にパッと亂れる。手先だけは奇用らしく、長い指が銀のやうに光る針を巧に運ぶ、赤い裏が色艶の惡いお房の顏を氣味惡くポーと染める。

次の座敷は至つて靜かである。折柄前の家から六段の琴の音が急にして來た。お房は此の琴の主人の未だ十二歳ばかりの可愛らしい下町風の娘を思つて居た。家は極めて狹く、生活もそれほど豐のやうでもないのに、娘二人には遊藝を習はせ、一人息子は遊び人風で、常に軟い衣服を裾長に着て、白足袋に麻裏を引つかけて居ると云つた風の生活も父親が江戸子風の鳶の頭だからだとそんな事も思つて見た。自分も十歳頃から三絃を習つたが祖父母の許に引き取られるやうになつてからふつと止められて了つた事、今では既う撥とる術さへ幾變遷の身の不幸に忘れて了つたとお房の常として又しても過去の悲しい身の運命のみ偲はれた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

電車の音が遠くする。隣の子供も學校へ行つたのか極めて靜かである。お房は斯うした靜寂の裡に居ると引き入れられるやうに自分の身の果敢無さが思はれて來る。はては手の方が留守になつて茫然と空を見て居る。そのうちに悲しい思ひ出も、自分の事も忘れて了つて晝の料理の事や、晩の事を考へて來る。それも別に深く思ふでもなく、今度は仕事の工夫――羽織を着物に仕立直す事や着物を羽織に縫ひ代へる事や、大きい着物を小さく直す事、洗濯や、張物のたまつて居るやうな事が急に氣になり出した。さうして天氣を危ぶむやうに窓を見上げると、此の時日影は窓から去つて、秋の風が立てつけの悪い障子の間からスーと忍び込むで來ると、半ば白くなつた亂れ毛の襟もとにひいやりと觸つて行く。ああ曇つて來たらしい、洗濯も張物も今日は出來まいと思ふと漸くに責任から逃れたやうにお房の心の中はスーとした。すると既う何にも考へる事が失なつて安心して死んで行く人のやうにいつの間にか瞼が合つて手が膝の上に落ちて、引きつめた束髮に結つた長い頭がガツクリガクリとしだした。果ては大きな口の締が湲んで來る。無心となつて遂に縫ひかけた衣服の上にお房の身體はのめつて了つた。

物音のなかつた外に人の足音がして木戸がギーと開いた。小刻みの下駄の音が忙しく格子戸の外に止まる。

『義姉さん居るかい。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お房は既う微な息吹をかいて居る。

『義姉さんは居ませんか？』

二言目にお房は跳ねられたやうに飛び起きた。其の顔には尠からぬ狼狽の色が見えた。障子を立つた儘からりと開ける。同時に格子戸が強く開く、

『あんたか。』とお房は二言目に直ぐ其の聲が弟嫁だとは知つたが斯う云つて子供を肩負つて突つ立つた相手の顔を見た。

『義姉さん。直ぐいらつしやいつて。』

お房は弟嫁の小さい顔が引き締つて、さらでだに強い目が、一層つり上つて、口元が神經的に震へてゐるのを見て、又何事か起つた事を知つた。

『什うしたの？』と心もとなげに怖々と聞いて見る。

『何でもいゝから直ぐにいらつしやいつて、昨夜から良人が癇癪起こして居て困るよ。』

『でもこれから秀子さんが英語にいらつしやるんだもの。』

『そんな事云つて居るから良人が腹を立てるんだよ。』

此の時次の座敷から靜かに出て來たのは二十二三歳の色白の澄んだ水のやうな顏をした女、油氣のない髮を無雜作に束ねて、黑い後櫛だけをさして居る。今迄目をつかつて居たらしく疲れたやうに二重瞼の目を瞬いて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『あら叔母さんですか、お寄りなさいな。』と玄關口に出て來た。頬杖の跡が左の方について居る。
『有難う。』
『秀子さん貴女これからお出になるんでせう？』とお房は兩方に氣を兼ねるらしく斯う聞いた。
『エヽ、行くけれど、什うかしたの？』
秀子はお房の弟嫁の樣子を見て常も乍らの事とて、又何事が起つのだと直ぐ感じた。
『義姉さん。私は歸るからね。直ぐ來ないと又打たれるよ。』と既う出やうとする。
『でもお夏さん！』と困つたらしくお房はあわてゝ呼び止めた。
『お夏さん、お房さんに用事が出來たんでせう。』
『さうです。』
『それならお房さん行つて來るといゝわ、私今日は英語の方を休むでもいゝから。若し歸れたら今日早く歸つて來て下いな。私買物に行つて來なければならないから。』
此の言葉で漸く安心したらしくお房は内に這入る、弟嫁のお夏はいつになくツンケンして歸つた。
秀子は再び机の前に坐つたが、本を見る氣になれなくなつた。又お房の事で一騒動起つ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たと思ふと其の解決に困じ果てた。それに二月前十圓と云ふ金子を父の貯金の中から出してお房の弟に一時貸してやつたのが今に返して呉れない。それが故郷の父にても知れると又眞綿て首を締めるやうな叱り方をされなくてはならぬ。百圓父が置いて行つたそれも今月て使つて了ふし、さうすれば是非とも十圓の金子の理由を明かにしなければならぬ。幾度もお房を通じて催促もして見た。けれど二三日の中にとのみ云つて的に少しもならなかつた。行けば下にも置かないやうな待遇をして、近頃の企を一々悉しく話して、今にも幾萬圓と云ふ金子が轉りこむやうな事ばかり云ふ。それも主人の身になつては空言や申し譯のみでないらしい、的にしきつて居るやうなので、其の小心で神經的な女のやうな主人の心が何となく哀れにもなつて今迄正面から催促もし得なかつた。尙ほお房を無給金で使つて居ると云ふ事が常に秀子の心にあるから強いて無理な事も云はれなかつた。がもとより禮はするつもりなので、斯う折々事件が起つたりするやうなら何とか方法をつけなければならぬと、秀子は一杯開けた狹い庭の方を見て考へて居た。

　お房は心がせくらしく、胸がもうせいせい云ふ位にはづむで來た。淚が矢鱈目に滲る。汚れた前掛だけしめ代へて髮も解き上げずに襖を開けて、

『急いで行つて來ますから。若しおそくなりましたらね』と夜の料理の事を話して急いで外に出た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

日があたつて何となく暑苦しいやうであつたから、引き蹈つして毛繻子の洋傘を持つて出た。

江戸川へ出て、石切橋を渡つて電車道をつッ切つて神樂坂へ向つた。心のみはやつて餘り自由でない足が倘ほの事進まない。十足ばかり馳けて見るが、息が續かず又そろ〳〵と行く。殊に登りなので、常も右左を見て通る癖なのが、何ぞ一大事が自分の方にふりかゝつて來て居るやうな不安を覺えてそれどころではない。大きな體と、足の大きなのさへ重さうで人の見る目も苦しさうな皺のよつた廣い額には直ぐ汗が流れ出した。勝手着の裾や居敷の穢れた着物の儘で何構はず賑かな神樂坂へ來て矢來の方へ向つた。いつも立ち止つて見送るやうな美しい服裝の女も今日のみは目に止ならなかつた。矢來の靜かな道へ下りると少しは心も落ちついた。秋海棠が家の蔭の方に咲いて居たり、木犀の黄な蕾が開きかゝつて居たり、紅の薔薇が垣に咲いて居たりする趣ある道をお房は急いだ。

お房の家の脇には大きな松の樹がある。それを目的にお房は一歩一歩家に近接くのを知つたが既う四五間で一寸曲れば自分の家であると思ふと急に足が進まなくなつた。

噫！嫌いな家！自分の家ではあるが什うも永久に親しい家として居る氣がない。弟の顔——とお夏の顔——それをお房は心に描くと何か目に見えぬ怪物にでも迫られて居るやうな心持がして、目を掩ひ、振り拂ひもして其の厭な影から逃れ度いやうな氣がする、斯う

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

した心地を忘れ度い爲めに人の家に行つて自ら好むで働いて居るお房は其の平常も疲れて居るやうで茫然して居る心に自分の家と他人の家との感じが明瞭とうつゝて居る。殊に今日は自分に又降りかゝつて居る、厭な事があるのだと思ふので一層足の歩みが緩い。

お房は斯う迄家を嫌つて居乍ら三日にあげず此の道を往復するのである。少しでも家を遠去かると直く弟に叱られるからなので云はば御氣嫌伺ひに出入して居るのである。

木戸をギーと開けて急いで濕つた段を四つ五つ下りると格子戸をからりと開けて、其の儘馳けこむやうにして障子を開けた、開けると目の先に三歳になる男の子を抱いて立つて居るお夏の蒼い顔が電光を眞面に受けたやうにお房の心を射た。

『義姉さん、何だい騷々しい。少し靜かにしたらいゝじやあないか、見つともない。』

『急いだものだて。』と碌に口も利けなくつてお房はお夏の前へ小供を抱くやうにしてペタりと坐つて了つた。

『相ひ變らず騷々しい奴だな。』と玄關脇の二疊から弟の聲がした。

『又木戸を開けて來たね義姉さんは。金坊が出て行くじやあないか。玄關も明けつ放してさ。』

お夏の眉には深い深い癇癪が現れる。

お房は又狼狽して尻から先へ立つて木戸を締め、格子を締めて來る、其の姿を屹と見て

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

居たお夏は、
『義姉さんの髮は何だい、そりやあ、白髮を亂したところは丁度鬼婆見たやうだ。』
嘲罵をあびせかけられるので、一層お房はまごまごして了つた。
『結ひに來たらいゝじやあないか、義姉さん。』
『まだ結構じやわ。』
『何が結構だらう。なあ衣服だつて………』
小言を一々口に出して云へぬ程焦々するらしくお夏は二疊の襖を開けた。
お房の弟源三は紋の大きな黑木綿の袷羽織を引きかけて背を圓くして障子に面した机に向つて何か書いて居た。傍には靑い美濃紙の罫紙に美しい字が幾枚も書いてあつた。
『貴郎！』とお夏は背後から良人に聲をかけた。
源三は筆を捨てゝ身體を向けた。而して机の脇にあつた敷島の二三本殘つたのを引きよせた。
『姉さん。何して居るんだい。』
お房は何時の間にか勝手へ行つてコトコトして居る。
『又義姉さんは……』とお夏の甲高い聲がする。
お房は口をモクモグさせ乍ら弟の座敷へ這入つて來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『眞當に義姉さんは變な人だね。家へ來ると勝手を探し廻るんだもの。何もあんたの留守に贅澤なんかしやあせんぜ。』

『何さ、今金坊が欲しいと云つたからさ。』

金坊と云ふ子供が手に薩摩芋の煮たのを持つて這入つて來た。

源三は煙を吹いて姉をヂロヂロ眼鏡越しに見て居た。

『姉さんは袷がないのか。』とお夏の方を見た。

『ありますよ。』

『でも未だ單衣物じやあないか。羽織はないのか。』

『ありますてせう。義姉さん何故其麼風して來るのさ。』

『働くにやあこれでいゝよ。』と座つて後に手をやつて紋繻子の狹い丸帶を小さく引き結んだ上を叩いて居る。

『羽織でも着てくればいゝじやあないか。義姉さん。』

『面倒だからさ。』

『面倒だつて姉さん、少しは弟の身分も考へて見るがいゝ。實家の事も考へて見るがいゝ僕が姉を奉公に出して、之加も乞食のやうな風姿をさせて居るつて故郷に知れて見ろ、親戚へだつて顔向けも出來ないじやあないか。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お房は大きな飛び出た目を障子の方へやつて兩手を帶の結び目にのせた儘茫然した顏をして居る。

『二八も今度東京へ來るつて云ふじやあないか。僕とは同じ兄弟でありながら一番仲が惡いんだから、又什麽事を云はれるやら判つたものじやあない。少し姉さん、貴女のやうな馬鹿でも考へたらいゝ。』

『二八が來るつて？』

『來るさ。』

『さうか。』

『貴郞、あの事は―』とお夏が何か云はうとするのを、

『姉さん、貴女に少し云ふ事がある、姉さんは何のつもりで秀子さんの家へ行つてるんだ。』

『何の積りつて？ 秀子さんの家だつて私が居なけりやあ困るからさ。』

『家にだつて姉さんが居なければ困るじやあないか。子供はあるし、それにお夏だつて唯の身體じやあなし、それに姉さんは、僕が今度信州へ行つた留守だつて家に歸つて居なかつたつて云ふじやあないか？ エ姉さん。あれほど僕が賴んで行つたのに、それでも姉さんは家を嫌つて花田さんへばかり行くのかエ？ 姉さん。お夏もお夏だ、默つて姉さんを歸すと

云ふことがあるか』

源三の見苦い程低い鼻から煙が太息のやうに出る。

『だつて貴郎！姉さんがどうしても歸るつて云ふのですものねえ。義姉さん！私はあんたの爲めに良人から、とんでもない疑ひをうけてしまつた。』

三四ヶ月になる小供をお腹に持つたお夏は窪むだ目のはたが黒くなつて、若い昔小町と云はれた顔にはそばかすが高い鼻頭の邊に一杯出て色艶が悪く、神經的に口も目も震へて居る。

『姉さんは他人の事となると一心になつて、家の事となると少しも構はない。僕が立つ時に言を分けてあれほど頼むだのをそれさへ聽き入れないんだ。』

『そりやあ義姉さんは花田さんに居た方がいゝからですよ。』

『いゝからつて家で困るのにそれも構はず歸してやるつて法があるか。何人も何人も僕を馬鹿にして居るんだ。もう知らん。お夏には暇をやるから今から出て行け。姉さんは故郷へ歸してやる。僕は、僕は下宿て勉强する！』

源三は堪へかねたと云つた風に立つて障子を開けて椽に出た。

『エヱ、私、出ろとなら出ても行きます。けれど、こんな事て出て行かれたものじやあない！義姉さん。私はあんたの爲めに出されるのだ。ゑ、什うして呉れる？義姉さん。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

歯をキリキリと喰ひしめて、破れさうに引きつゝた目には涙が一杯たまつて居る。お房はお夏に斯う云はれて急にオロオロと泣き出した。

『義姉さんが良人の云ふ事をきかないものだから……私は義姉さんを虐めて家を出して了つて、而して、彼のお隣の小宮さんを引き入れて居るんだつて……そ、それを楯に良人は私を出すんだつて云ふのだよ。義姉さん！私は、私は此の様な恥しい事を云はれて小供を連れておめおめと故郷へ歸つて行かれると思ふかい。』

『今更何を云ふのだ。電報を打つてやる、電報を打つて親父を呼んで引き渡してやる！』

源三は椽に立つて叫ぶやうに斯う云つて。

『源三！そ、そりやあんまりだ。私だつて故郷へ歸られた義理じやあない。』と大聲をあげて泣く妻をお夏は涙の目でさも憎く憎くさうに見て

『貴女などいゝさ、私が出たあとじやあどうでもなるから。』

既に晝近くもなつたらしく、椽に日影が餘程さして、三人の顔もほてつて來た、豆腐屋の笛の音も遠くに近くに高く、低く聴こえる。

源三は巻煙草の吸ひ殻を濕つた庭に叩きつけて這入つた。默つて机の前に二人に背を向けて坐つた。

源三は今年二十九歳である。此の齢になるまで全く學生生活のやうに暮して來たので、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

三年前お夏と夫婦になつた頃は神田の私立大學に學んで居た。而して辯護士の試驗を受けるつもりで居たのが、其の頃華族に務めて居た姉が歸り、子供が生れなどして毎月國から送つて來る金子だけでは到底足りなくなつたので、學校を退いて家で勉强する事になつた。がそれから一層生活難に責められて、果ては喧嘩の仲裁に口を利いたり、物の賣買について相談の相手になどなつて、少しばかりの禮金など貰つた。がそれ等は皆的にならぬ少額の金子の事とて少しも生活の安全を齎らさなかつた　仕方なく手當り仕第に職業にあたつて居ると、或人が今度湯屋の釜を販賣するについて、それを株式にしたいから、貴君は學問のある方故、一儕引き受けて運動して呉れないか。若し成功したら二十株は御禮として進呈しますからとの話を持ちこまれた。源三は三度迄試驗に不成功であつて稍失望して途方にくれて居た折柄、此の話を聽いて天が漸く自分を救つて呉れたのだと信じて一言にも及はずそれを引き受けた。生活に苦しめられて休まる暇のなかつた夫婦は唯々その成功をまつた。その爲めにお夏の衣類は悉く犧牲になり、使物とか、俥代とか、又源三の衣類などゝなつて了つた。その話の初つたのは二月頃であつたが未だ今に種々の障碍があつて思ふやうに運ばないので源三は毎日此の頃は心か焦々して居る。金子の爲めに信州へも行つて來る。又花田の方からも借金して居る。其の他米屋、炭屋、八百屋などには二月も三月もたまつて居ると云つた風であるが、成功さへしたなら御用俥で馳け廻れるやうな空想

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

をして借金など氣にもかけなかつた。而して辯護士などゝちらてもいゝと捨てゝ居たのであつた。然し今の様子では稍目的がはづれたやうな氣持なので、同時に試驗の方が急に氣になり出した。來年になると外國語が這入るとの事なので、英語も碌に出來ない源三は此の十一月にはどうしても受けなければならないやうになつた。

それを思ふにつけても生活に責められて爲かけた事業を思ひ切つて捨てゝ、一心に勉強しやうとまでは思はれない。何やかや源三の心は亂れて居ると共に少し智慧の足らぬ姉と足手まとひの妻と子が急に憎くらしく自分を苦しめる者の様に思はれて來た。いつそ花田の方へ姉をやりつきりにしやうかとも思つても見るが、親戚や何やかやの手前、奉公にさへ出して居ると知られるのも厭に思ふので、思ひ切つた所置も出來ずに居る、何か口實を設けて姉を國に歸し、妻子を捨てゝ一人きりになりさへしたら……と云ふやうな氣にもなつた。

若い血汐に燃えた戀の姿は、女の色香と共に消えて、源三の心は貧に痩せ、思ひに疲れて行く。妻からは遠く去つて、他の女の美しさのみが目に付くやうになつた。歸つては妻に向つて美人の噂をし、立居振舞、何事につけても叱り飛ばして暖い愛情を加へるやうな事は少しもなくなつた。

お夏は良人に斯うした情無い仕打を受けて口惜しいとは思ひながら既う最後まで自分の

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

身を投げ出して置くやうな心持になつて明日の我身の程も强いて考へずに居る。

今更何と思つても仕方がない。良人の性質を知るお夏は既う此の頃は何かにつけて出て行けがしにする其の心もよく解して居る。お夏は出て行けとなら何時でも出て行く心持はあるが、其の度に良人の心が何となく疑はれて此の儘出て行くのも口惜しいやうな氣がする。それに兄の世になつた故鄕の家に歸る事も出來ないので、出るには相當の事をして貰はねばならぬとも思つて居る。唯々口惜しく、腹立たしいは義姉なので、馬鹿は馬鹿相當に人の同情をひいて、何でも人は自分が虐待するやうに思つて居るのが何より癪に觸つて居る。良人が何かにつけて姉を叱りながら又自分にも辛く當るのも、心から姉を嫌つて居るのでない事も知つて居る。

晝飯の膳に三人は默つて座つた。別々の考が皆の頭に渦を卷いて居る。

お房は別に深く弟の心も分らなければ又弟嫁の云つた毒々しい言葉なども何日もの事のやうなつもりで聽いて居た。唯自分が故鄕へ歸される――と云ふやうな事を考へるとたまらず悲しくなつた。二十年の昔の若々しい時に自分の一生の幸福を殺し、今のやうな情ない身になり果てた思ひ出の故鄕へはどうしても歸る氣はなかつた。母は三年前に死んだが父は未だ生きて居る。此の樣な自分の姿を見たらどんなに驚くかと思ふと其の泣き悲しむ老の姿を考へるのも辛い氣がする。それに昔の良人の噂――今は入牢して居ると云ふやうな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

――其麼事を聞くのは何より辛く思ふので今花田へ行つてさへ居れば若い人達の中で氣も晴々して面白く自分の身の現在も忘れて了ふ位なので、お房は花田の家を去り度くはないのである。

お房は湯を飲みかけて不圖思ひ出したかのやうに、

『あゝ彼の秀子さんがなあ拾圓都合が出來たら返して呉れつて。』

他人に云ふやうにお房は斯う云つた。

源三はヂロリと姉を睨めた。お夏は良人の顏色を讀んで居る。

『フン拾圓？虫のいゝ事を云つて居らあ。』と源三は卓を隔れて、

『姉さんはお雪さんや、美代さん達に婆や扱ひにされてそれで良い氣になつて居るのかい。お前さんは花田さんへ行つて下女よりひどく使はれて居てそれで一文だつて貰つて居ないんじやあないか。一體姉さんは四月も九月も働いて居て前掛一枚貰いもせずそれで何とも思はないのかい。此の世の中で姉さんのやうな馬鹿はないぜ、婆やだの、女中だのと云はれてまで喜んで働いて居る姉さんは誰が見ても拔けて居る。』

『だつて秀子さんは何れ御禮をするからつて云つて居るわ。』

『其の「何れ」が分らないのさ。』

『でも借りたものは借りたものじやわ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『馬鹿！未だ云ひくさるか。』

源三は拾圓の時借りを心にかけて居るだけに斯う云はれると息のつまるほど腹が立つて來た。姉があまりに心無いのがいかにも情ない、馬鹿と云はれやうが、お人好しだとおだてられやうが唯嬉んで働いて居る。と源三は見る影もない姉の有樣をつく〴〵見るにつけて急に花田の事が氣になつて來た。今迄姉が花田からどんな待遇を受けて來たか、其の報酬も一文たりとも貰はない事などが源三の心に浮むで來ると、秀子の常も愛嬌のある顏の何處かに人を冷笑するやうな所のある面影や、近づくべからざる強い所のあるのが女として憎くらしいやうな氣もした。

『既う拾圓などの事云はいでもいゝ。花田へなど行くな。行くな。花田の爲打は實に失敬じや。』

お夏は二人の樣子を見ながら、子供をだましたりして居たが、

『姉さんの羽織だつて彼のまゝですよ。』と口を入れた。

『髮も結ふ暇もなく、着物も其の態だ。羽織を穢されてそれも默つて居るなんて……』

源三は總ての事が解決出來ないので、手の出しやうも、身の動かしやうもないやうな焦々しさを感じてつと立つた。

机の上まで日がさして來て居る。開けた狹い庭には唯一本古い梅の樹が半ば枝を拂はれ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て木の葉も大方散つて淋しさうにして立つて居る。家より高い所にある竹垣の外を人の通る影が見える。土地の低い家は日あたりも惡く午後少しの間二疊の方が暖い位なので、濕りがちな家は殆ど一日中小暗く、陰氣なのである。

源三は筆をとつて乾いて居る穂を煙草で黑くなつた前歯で矢鱈にかみながら墨をすつた。其の心は未だ焦々して何かに當り散らして奴鳴つてやりたいやうな氣がする。

左の手文庫から卷紙を出して直ぐ筆を走らした。

薄色の洋傘と美しい帶と、白い足袋とが竹垣の間に見えて、輕い下駄の音が過ぎて行く。源三は額に垂れて來る分けた黑いチックの香のする髮を筆を持つ手で拂つて一寸女の氣配に氣をとられた。

お房は其の日は子供の小守などして過ごした。何かにつけてお夏の小言をきゝ、弟の癇癪聲をきいても餘り氣にならずさんざん泣いた後のやうに心の中が空虚になつて茫然して了つた。が折々思ひ出すは花田の事であつた。

姉妹が面白さうに勝手で働いて居る樣子も偲ばれた。此の陰氣な濕ぽい家に引き代へて愉快な花田の家を懷しくも思はれた。

お房は夜床の中に這入ると常もの癖で中々寢つかれない。務めをして居た頃から寢るのに中狹の帶をキチンと結ぶ習慣だつたので今でもそうして床に入る。とかく健康のすぐれ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ない身體の足は夏でも冷えるので、蒲團の中に小さく曲げて寢間着で包むで了ふ、それでも此の頃のやうに夜冷えのする時はぞくぞく寒くて眠られない。花田に居ると一番下の妹娘を抱いて寢る、その爲め寒さなど知らなかつたが時折自分の家で一人寢ると一層眠れない。とつい種々の事を考へてくる。忘れて居た過去の事、未來の心細さ。現在の境遇――お房は泣いたり悲しんだりして夜の更けて行くのが寂しがつた。

蟲の啼く音が身に染みる。幾秋を種々な悲しい思ひをして夜更けて此の蟲の音を聽いた事が朦朧と浮んで來る。十七の齡從兄の所へ嫁して十九の齡良夫の不身持の爲め強いて出されてから尼のやうな生活を祖父母の許でして居た事、それも矢張袷を着る今頃であつた。二十歲の時、家を飛び出して名古屋に逃げて、彼の天主閣の御濠に身を投げやうとした事、それも月の冷い蟲の音がお濠の堤の草の中からして居る頃であつた。而して心配苦勞の結果病氣になつて腦病院に這入つた事、彼の病院の看護婦も自分と同じやうな境遇だつた事、名古屋の妹は其の頃姑に虐められて泣いて居たが今では姑が死んで樂であらうと云ふやうな事、それから身體が全快して出京して××伯爵家の奥女中をして居た永い永い十二年間、弟が病氣の爲め暇をとつて下宿屋の二階で看病して居た事、お夏が來て家を持ち子供が出來ての此の三四年間。既に自分は四十である。腦を病むでから氣が變になる、頭の髮は眞白になつて染めなければ居られなくなつた事などをずうと想ふと全く自分一人

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

世にも不幸の者のやうな氣になつて果ては泣かずには居られなくなつた。弟夫婦と子供は六疊に眠つて居る。狹い二疊にお房は目を閉じて泣いて居た。思ふ樣泣いた結果旣に涙も出なくなつて今度は目を開いて茫然他人の事を思ひまわして居た。お房は常も自分の事を思ふかと思ふと直ぐ他人の事を考へて來る。「姉さんは他人の事となると自分を忘れる」と弟や弟嫁に云はれるほどに全くお房は人に馬鹿と云はれても他人に賴まれた事はどんな恥しい目、苦しい目をしても盡す、それを又お房は唯一の働きのやうに思つて居るのである。花田の家では自分が居なければ困るのだ、何と云つても自分は花田の家の監督者でもあり、世話人でもある、若し彼の若い娘さん達ばかりの家に自分が居なかつたら、世の中の批難もあらう。又秀子さんにしても什麼過失でもし出かさないとも云へない。今迄に何一つ世間の口の端にかゝらず立派にして來たのも自分が居るからである。とお房は時折人からも云はれ、自分でも自慢して居る事を又思ひ出した。それにつけても花田へ行かれないとしたら……………お房はそれが何より悲しく思つた。

翌朝になつて源三は朝飯を濟ますと洋服を着て出て行つた。お夏は例のやうに金坊を抱いて門まで送り出した。旣う昨日の事は忘れて居るやうであつた。

源三が出るとお夏とお房は何となく親しい言葉をかけあつた。お夏も昨日のやうに腹も立てず今度の事について委しく說くやうに義姉に話した。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

第一に良人は自分がお隣の小宮さんと親しいやうに疑つて居る。今度信州へ行つた留守義姉さんを花田へやつたのも何か理由のあつたやうに思つて居る、それが何より口惜しいとお夏は目に涙を湛めて云つた。

『義姉さん、全く私の心になつて見て下さい。今のやうに良人からは出て行けがしにされてそれでも斯うして働いて居るんだもの。私だつて女の意地として何でハイ出て行きますつて此の儘出られるかい。ねえ義姉さん。』

『さうとも、さうとも』とお房は何となくお夏を憐れに思つた。

『源三はああした性分な人だから、全く困るわ。』

二人は太息を合はした。

お房は晝飯を濟まして花田へ歸つた。今迄歸らなかつたのが何となくすまない氣がして急いて歸つたやうに飛び込むだ。

家では晝を濟まして後片付を姉妹してして居た。

『晩くなつて濟みません。さあさあ私がしますから。』と勝手へ出る。

『あら歸つたの。』と秀子が意外と云つたやうな顔をすると次の妹が、

『歸らないと思つたわ。』と姉と顔見合せた。

『今日は日曜ですか。』と家の中が賑かなのにお房は氣づいた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『今日は旗日よ。』

云はれて途々國旗の立つてあつた事に氣づいた。九月二十五日の秋季皇靈祭であつた。

お房は勝手元を片つけて洗物もし、水瓶に水を一杯充たして漸く安心したやうに常に自分の坐る高窓の下に來た。

座敷では姉妹四人と弟一人で何か小聲で話て居る。と下の二人の妹が風呂敷を持つてお金子の音をさせて勢よく戯れ乍ら出て行つた。間もなく、

『お房さん!』と秀子に呼はれてお房は急いで次の座敷に行つた。

秀子は自分の一貫張の机に向つて居た。弟の春雄は障子を開けて庭の方を見て居た。

秀子は常もの優しい顏も見せず、此の女の取りすました時の水のやうな顏をしてお房を見た。お房は直ぐ弟の昨日云つた詞をいろいろ思ひ浮べた。

『お房さん、昨夜ね、貴女の所の叔父さんから手紙が來たのよ。隨分慘い手紙!』

秀子は机の上にあつた半ば破れた手紙をお房の前へ突き出した。

『昨夜私が出た留守、春雄が見て半分破いてしまつたんだけれど……………何だつてあんな事云ふの。學問のある人らしくもない。』

お房は昨日弟が手紙を書いた事は知つて居たが別に氣にもかけて居なかつた。

『お房さんは既う來て下さらないと思つて居たわ。』

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『いゝえね、弟がつまらない事ばつかり云ふので……』と狼狽て云ひ解かうとした。

『何も私、お金子の事でお房さんを虐めやあしないわ。叔父さんは全く惨い事を云つて居るんですもの。』

『拾圓のお金子も何れお返ししますつて……』

『そりやあね、お房さんの羽織にインキがかゝつてそれを腹を立てゝいらつしやるのももとより私の方が悪いんですから。』

『何構はないんですよ。』

『然し何も血染だの何だのつて仰しやらなくつともいいと思ふわ。』

『いゝえ彼麼羽織を着れないんですから。』

『お金子だつて私の方でも御禮は御禮としてしやうと思つて居るんですから、叔父さんに仰しやられるまでもなく私はお房さんに御禮もしないのを濟まないと思つて居るんですからね。』

『そ、そんな御禮なんて……』

『いゝえ、それは私の方が悪るかつたんですわ。羽織を血染にしたのも悪るかつたの。でも何も秀子先生だの、秀子女史だのなんて云はなくつたつて、お房さん叔父さんはそりやあ随分な事を云つてよこしたのよ。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

秀子には今更口惜しげに手紙の字を見た。

『私の方だつて叔父さんがお房さんを貸して下さらないと仰しやるなら仕方がないけれど……それも私の方でお房さんを下女扱ひにしたの、婆や扱ひにしたの、買物のお供をさせるのと……そりやあね、貴女の御故鄕は何萬圓と云ふ財產家だつて叔父さんが仰しやるまでもなく知つて居るわ、ですけれどそれを今更何と云つたつて仕方がないもの。お房さんだつて私御氣の毒と思へばこそ何かと氣をつけて居るつもりだわ』

『そりやあもう分つて居ますわ。』

『で叔父さんは既う姉さんなど貴女のお宅へなどやらないつて明瞭とおつしやつておよこしなすつたんですからね、さうまで誤解やら何やらで今迄のやうに絕えず面白くない事を云はれてはね、私の方でも迷惑なのよ。私にだつて魂はあるもの。なんぼ女だつて昨夜のやうな手紙を受取つては默つて居られないのよ。』

『そ、そりやあもう弟が惡るいんですから、何卒ね、秀子さん……』

お房は秀子に斯うした種々の事を聽くのが辛いので、秀子の口を掩ふやうにして口を入れるのであつたが、秀子は常の秀子ではなかつた。

『でわ、お房さん。貴女も故鄕に歸らせられるつて云ふのだからまあいいわ、何ぞ御禮をしたいけれど、御存じの通りお金子は一々父の方へ云つてやらねばならないんですからね

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼の十圓を御禮として差し上げますわ、三月半ばかりお賴みしたわけなんですけれど、」
お房は急に悲しくなつた。
『いゝえね、弟が馬鹿なんですから、そ、其麽事は……』
既うお房は泣いて居る。常も云はうと思ふ事が口に出ない。
『私も氣持が悪いわ。私だつて何も……』
秀子はお房の境遇を十分同情よせて居るものゝ、彼の弟のする事が皆腹が立つ事ばかりなので、自然とお房にも小言も云ひたくなるのである。
お房は何を手紙に弟が書いてよこしたか知らぬが、秀子がこれほど腹を立てるのを餘程の事であらうと思ふと、日頃の秀子の情を知つて居る心に急に濟まない氣がして來た。
『どうぞ家へ一所に行つて下さい。而して弟の前で私云ひときますから。ね秀子さん。而して弟に謝らせますから。』
『でも叔父さんはあゝした方なんだから……』
秀子は既う何も云はなかつた。
お房は泣きながら昨日の事を話し、而して秀子の同情を求めた。
妹達も歸つて來た。がお房を皆相手にしなかつた。何となく家内の一人のやうに取り扱はなかつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

お房は今迄弟の家に居るよりも此の家の方が居よく思つて居た。それと云ふのも、皆お房を家內の一人として、若々しい樂しげな欒の中に入れて居るからなので、或時はお房は下の妹達と同じやうにはしやぎ切つて騷いて遊ぶ事もあつた。人も云ひ自分も此の頃顏色もよく肥えて來たと思ふやうになつた。

日曜の日は午前と午後に一度づつ茶菓子を買つて來て家內集つてお茶を飮んで語りあふのが常であつた。お房はそうした欒の中に入つて同じやうに若々しい話をして娘達を笑はして居たが、今日は其のお茶の時も皆の者から相手にされぬやうな氣がして非常に淋しく思つた、わざと暗い顏をして直ぐ高窓の下に來て仕事をし初めた。

夕餉の仕度をする頃になると、今迄あつた事も忘れたやうにお房は他意なく働き出した。夜は姉妹の復習の聲を聞きながら針を持つたが直ぐ無心らしく居眠りをし出して果ては打ち倒れてしまつた。

翌日もお房は朝早くから起きて姉妹や春雄を學校へ出して了ふと一人殘つて居る秀子と暫く高窓の下で話をした。而して幾度もくり返す今迄の自分の不幸を訴へるやうにして語つた。

秀子は默つてそれを聽いて居た。

お房はそれからも相ひ變らず弟の家へ出入して、花田の家の爲めに身をおしまず働いて居た。

——完——

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

自由劇場の二夜

しぐれ

十月二十七日は宮根にゐる私の妹が婚禮する夜であつた。私は其準備をすつかりしまつて、東京の家の留守番に殘されてゐた。この不忠實な留守番は、年に二度しかない、そして日に數へたら四日間しかない自由劇場を見落す事が出來なかつた。自由劇場の初演の時に感じた、俳優と觀客との引締めた、氣分の一致したこころよさを、いつでも自由劇場で味はへるといふ欲ばかりでなく、私をどうしても留守番でじつとさせておかないのは、この二夜さの短い時間を應用して、横濱あたりから、日頃行違つて逢ひ兼てゐる、おまけに病のある友達が態々出てきてくれることにもなつてゐる。其外にも大概の知人には逢ふことが出來る樂しみがある。それゆへ自由劇場の二夜は、幕の明いてゐるまも嬉しく、幕の下りてゐる間も樂しく愉快である。二十七日の夜には、妹夫婦の行末に幸あれと祈りながら劇場へ車を急がせた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

前の夜は、私の手許へかなり長くあづかつてゐた、或る家の娘を送つて、上野のステーションから劇場へ廻つた。そして劇場の扉へ手をかけるまで、更にまた他人の許へ見習ひ奉公に、それも遠く奥州の山里へ行くのに、十一の時からひとつ所に起伏した人に見送られ別れるのに、涙もこぼさない若い娘の前途について考へて居た。ステーションの燈火は明るいようで暗く、黒いようで赤かつた。劇場近くの外濠のふちを來たときに、きらきら輝いてゐた燈火は、みんな青く紫ばんでゐた。月も出てゐなかつた、星の影も見かけなかつた。けれど曇つた空ではなかつた。

自由劇場は、場内の美で日本第一の劇場となつた、帝國劇場で催されたのである。それでもどこまでも自由劇場は、まだ試演のつもりであるとのことであつた。ことに今度演じた「寂しき人々」は、ヨハンネス、ヲッケラアトにはまる俳優がないので、此春も一回後へ殘された脚本である。これは新派の井上にさせたらといふはなしが、進んでゐたらしかつたが、井上の都合で自由劇場へ加入することが出來なくなつたらしかつた。左團次が自分の立場として、體にない役を引受けたのは氣の毒に思はれる。然乍ら俳優は、はまり役ばかり引受けてゐたのでは仕方がない。好くはゆくまいと思はれたのを、案外にこなしてこそ、其俳優の伎倆を示すことが出來るのであらう。左團次のヨハンネスは調子が強すぎて、惜いことに役によせる同情が半分以上減つた。お坊ちやん上りの自家の强い、我儘息子

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く丈、淺ましさが氣づかはれます、萬一やうつろな魂ひを盛つた肉體であつたなら一年立つても二年たつても、其は徒勞と申すのみで御座いませう。

もう愈々今年もお名殘となりました。一夜明けてお目にかゝる次號はどんな體裁と内容とを備へて諸嬢の前に現はれるて御座いませうか。此少さき女王の母となつてこの子の爲に御讀し下さる點に於て等しき責任と愛情とを自覺して居らつしやる大方の諸嬢、如何に少さくとも私共丈の力で築き上げつゝある王國と其少さき女王との爲に御心をお傾け下さい。

木枯の風漸寒く、振ひ盡した淋しい木立に夕日の影の薄れて行く頃、

――十一月二十日――

いさゝか感じました事を。折角皆樣幸福な新年をお迎へ下さいまし、

本年の終刊に際し

（K）

社員諸姉へ 御報告迄

◎前號に豫告致しました通り、本號には、青鞜社一同の「人形の家合評」を掲載致す筈になつて居りましたが、發表後如何にも時日が短かいので、とても完全に纏め上る事が出來ませず、去りとて、だらしのない生半可な蕪雜々々なものを載せますも徒らに體裁をそぐ許りて御座いますから此處一回丈け延しまして、來春の誌上に於て華々しく皆樣に御目に懸ろことと致しました、劇の主人公、解放せられたろノラが皆樣のお眼に如何に影じ、如何に反射して誌上に現はれろで御座いませうか、千姿萬態、折角御骨折り下さいまし、尙まだお出しにならない方は早速振つて御投稿を願ひます。參考書、紙數の事、評論の爲便宜上設けられた部類問題等は前號に委細掲載致して御座いますからそれに就て御一讀を願ひます。

◎尙、岡本かの子、永安初子、岡清子、小磯とし子、多賀巳都子、原田琴子の諸氏は今回新たに御入社下さいました、こゝに御紹介して、今後の御親しみを願ひます。

◎それから前號の誌上で一寸申上ました研究會の方も大分交渉は進みましたものゝまだ明らかに發表致すことが出來ませんので之又、來春のことゝ致します、それに本年も今月限りのせわしない折柄故、きまりよくお正月から開くと致した方か宜しからうと存じます。皆樣、何卒、此新らたに開かうとする研究會に就てな

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

此度は背景の方は、一場へ力を集めたので大層な出來であつた。演じる人達の方が敗けたようてある。小道具の中て嫌であつたのは、書棚にかけた幕の赤と黑とのきれてあつた。

初日には眞中の卓の小さい花瓶に、薔薇の花のさしたのが、ずつと其儘てあつたが、二日目には、幕ごとに異つた花が飾つてあつた。ちよいとした事ても、行届いた注意が嬉しく思はれた。

初日には三田文學會の連中があつて、お揃ひの手拭が出來たとかて、學生の人達の中には頭にまいてゐた人があつた。二日目には美術學校の連中が、赤い帽子のお揃ひてあつたとかて、畫家のブラウン(猿之助)が其帽子を舞臺へかぶつて出た。樂屋かんざしをよろこんて揃ひにさす、娘達とちつとも違いはない。學生さん達も可愛らしいものだと思つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

本年の九月初めて此世の中の空氣に觸れて孤々の聲を擧げた青鞜も愈々此處に、九、十、十一、十二、と四ヶ月を經て來ました。其發育振は如何て御座いましたらうか？ 大方の諸嬢が魂を含められた小供、眞實女の母達に依つて愛育せられ、其母達のみの手に依つて教育せられ、開發せられて行かうと云ふ靈魂の上の小供はまだ中々笑ふどころでは御座いません、恐らく歯も生へますまい、生れて來る迄はあゝも斯うも、美しかれ、幸あれ、才あれと願はるゝ世のなべての母心に等しく様々な望みを嘱した子供も、生れて見れば中々宙に畫いた空想の樣に美しくは行かぬと同樣、此小供も矢張世間一般の御多分に洩れず、飴をしやぶらせられると泣やみ、風車を見せられると笑つたりする平凡一樣のものとなつてたゞ肉體のみスク／＼と延び立つて行くので御座いませうか。何にも特色のない――私は何より之を恐れます。萬一も生れて來なかつたと同樣であるならば、何の甲斐をもなすのでなければ――母達は何を物數奇に苦しんで之を生む苦痛を忍んだでありませうか？

唯女のみの知る天地、唯女のみの築き得らるゝ獨創の王國、無王國の女王たらんとする此小供に充分の誇りと充實せる力が漲つて居りませうか？ 兎に角生れる迄は人並々以上の意氣をもつて望みを嘱した子供が漸々此世の中の浮薄な空氣にしみて行つて、はては魂迄他と何の撰ぶ處なき平凡化したものとなつてしまふのではないらしいと思ふと、生れねば兎も角、肉體がまづ／＼安心に發育して行

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

く丈、淺ましさが氣づかはれます、萬一やうつろな魂ひを盛つた肉體であつたなら一年立つても二年たつても、其は徒勞と申すのみで御座いませう。

もう愈々今年もお名殘となりました。一夜明けてお目にかゝる次號はどんな體裁と內容とを備へて諸孃の前に現はれるて御座いませうか。此少さき女王の母となつてこの子の爲に御盡し下さる點に於て等しき責任と愛情とを自覺して居らつしやる大方の諸孃、如何に少さくとも私共丈の力で築き上げつゝある王國と其少さき女王との爲に御心をお傾け下さい。

木枯の風漸寒く、振ひ盡した淋しい

木立に夕日の影の薄れて行く頃、

——十一月二十日——

いさゝか感じました事を。折角皆樣幸福な新年をお迎へ下さいまし、

本年の終刊に際し

（K）

社員諸姉へ

御報告迄

◎前號に豫告致しました通り、本號には、青鞜社一同の「人形の家合評」を掲載致す筈になつて居りましたが、發表後如何にも時日が短かいので、とても完全に纒め上る事が出來ませず、去りとて、だらしのない生半可な滅茶々々なものを載せますも徒らに體裁をそぐ計りて御座いますから此處一回丈け延しまして、來春の誌上に於て華々しく皆樣に御目に懸ることゝ致しました、劇の主人公、解放せられたるノラが皆樣のお眼に如何に影じ、如何に反射して誌上に現はれるで御座いませうか、千姿萬態、折角御骨折り下さいまし、尙まだお出しにならない方は早速振つて御投稿を願ひます。參考書、紙數の事、評論の爲便宜上設けられた部類問題等は前號に委細掲載致して御座いますからそれに就て御一讀を願ひます。

◎尙、岡本かの子、永安初子、岡淸子、小磯とし子、多賀巳都子、原田琴子の諸氏は今回新たに御入社下さいました、こゝに御紹介して、今後の御親しみを願ひます。

◎それから前號の誌上で一寸申上ました研究會の方も大分交涉は進みましたものゝまだ明らかに發表致すことが出來ませんので之又、來春のことゝ致します、それに本年も今月限りのせわしない折柄故、きまりよくお正月から開くと致した方か宜しからうと存じます。皆樣、何卒、此新らたに開かうとする研究會に就てな

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

り、又雜誌の上なり、御氣付きになつた點及御希望等は御遠慮なく本社宛に御申込を願ひます、決して之が誰彼の雜誌でなく、又誰彼の開く研究會で御座いません限りは――!

◎面會日は從前の通り毎土曜日の午後よりと致して置きますから、社員の方々は本社へちとお話に御出かけ下さいまし。

◎社員の方々は毎月社費三十錢を其の月の十五日迄に御忘れなく本社に御納め下さいますやうに。

◎又皆樣方の玉稿は何にまれ、隨時本社宛に御送り下されば結構で御座います。

◎本社の爲特に御盡力頂いて居ります國木田治子氏は赤坂區田町七丁目一番地なる御私宅にて毎月一六の夜に松月古流生花、投入花、及千家表流茶道を松月古流家元藤城燧打瀨翁補助の下に指南せられて居ります、なほ晝の中は三越吳服店の方に御出勤との事です、

◎加藤籌子氏の御作 又々御多忙の爲編輯〆切に間に逢はず、豫告にそむいて本號にも掲載致されないのは甚だ御殘り多いことゝ存じますが然し面目を改めたる新年の誌上には之また一しほの輝きを添えることゝ存じます。何樣故あしからず。

◎大分御號續けて缺せましたから會籍社概則及名簿は今回は省きます、幾らか改めねばならぬ個所も御座いませうしつけたす處も御座いませうし致しますから、かた〲新年の誌上に更めてかゝげます。何卒之迄の處は前號、前々號に就て御承知下さいまし。

◎本社の事業を永續し、其發展を計るには經濟上の基礎を鞏固にする必要が御座いますから、多少に拘らず其本金の中に有志諸姉の御寄附をお願ひしたいと存じます。

(11. 20)

本號編輯責任　物集和
　　　　　　　木內錠

寄贈書目

三田文學(十一月號)	三田文學會
心の花(十一月號)	竹柏會
婦人の鏡(十一月號)	東京社
春夏秋冬(十一月號)	籾山書店
女子文壇(十一月號)	女子文壇社
朱欒(第一號)	東雲堂
スバル(十一月號)	スバル發行所
層雲(一ノ七)	層雲社
紅塔(十一月號)	紅塔社
新江戸(九號)	新江戸會
月光と泡沫(二集)	白藻社
警醒愛國婦人(二十六卷)	警醒愛國婦人會
獨文(詩人クライスト記念號)	雄聲堂
蝸牛(十一月號)	蝸牛吟社

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眺望佳絶

即席そば料理

菊そば

其他御好みに應ず

春は花見に

夏は朝顔

大瀧ありて納涼によし

四季の草花を陳列し御高覧に供す

秋は菊見に

冬は雪見に

四季共によろし

梅壽樓

團子坂中腹

菊そば本店

電下三八五七番

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

毎月一回一日發行
一冊二十五錢郵税一錢五厘

斯道唯一の演劇雜誌

歌舞伎

第百三十八號（十二月一日發行）

六冊前金郵税共一圓五十錢
十二冊二圓八十錢

新無線電話（圖藏—川上）…………室田武里
「金毛狐」について…………坪内逍遙
「野火」作談…………江見水蔭
碁盤忠信…………右田寅彦
幸四郎襲名…………松本幸四郎
帝國劇場を見て…………長谷川時雨
「邯鄲城」物語…………松居松葉
「邯鄲城」について…………藤澤淺二郎
歌舞伎座評判記（芹影女、時雨女）…………
羽左衛門「盛綱」の型…………森ほのほ
「堀川」を見て…………防風子
歌舞伎座藝談（仁左衛門歌右衛門）…………

戯曲 手袋（東京俳優學校教科用）　森鷗外

「寂しき人々」の舞臺稽古…………米太郎
「寂しき人々」の演出法…………林和生
「寂しき人々」を見て…………芹影女
大阪浪花座の「幸田幸村」…………山紫紅
金泉丑太郎日記「川上の活動」…………伊原青々園
五代目歌右衛門懷舊談…………伊坂梅雪
南京町の芝居…………山野芋作
故川上音二郎…………青々園
成功者としての川上君…………田村成美
十一月の脚本…………川村花菱
劇談會—劇壇時事—劇界一覽…………

本郷區湯島切通坂町
畫報社内
歌舞伎發行所
電話下谷二四八三
振替口座一八一〇六

飛ぶ鷺や時雨來る夜の膝頭　　抱一

俳味

十二月號　要目

吾身ながらも…………（卷頭語）…………梵雲寒月

連句談…………森山鳳羽

素人の見たる俳人…………寺澤陽風

山村…………鶉澤四丁

短日…………（懸賞俳句）

私解芭蕉の發句…………沼波瓊音

我を啓發せしめたる…………（懸賞文章）

初紅葉游覧記…………

新聞社の俳味…………小倉鶴峰

通り雲…………レモン法師

七部集總論（續）…………風雷子

口繪（煤掃）…………（湖龍齋筆）

妻の病…………沼波瓊音

附錄

太白堂史の一部…………太白堂桃年

惟然坊句集…………曙庵秋擧

每月一日一回發行

定價
一部　金拾貳錢
郵稅　壹錢

半年分前金
郵稅共　金六拾八錢

一年分前金
郵稅共　壹圓參拾貳錢

發行所
東京市本鄕西片町拾番地
俳味社
振替口座　東京參四參四番

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の花

第十五卷　十二月號　第十二號

古今集の歌風　吹田潤
閑是非　呉野湖音
刹那の感　青木正
前夜の嵐（小說）　岡部千代子
鵙が音　竹柏會同人
秋の三日　高橋月畔
北漢山の秋　大橋文之
雉獵　前田利定
版畫展覽會見物記　盲人
總　石榑千亦
楠緒女史を憶ふ　佐々木信綱

定價一部十三錢●半年前金七十五錢●一年前金一圓四十錢●

東京日本橋區本石町一ノ一　竹柏會出版部

振替東京四三〇〇番

辱
皇后陛下御覽
皇太子妃殿下淸覽
賜

臺灣愛國婦人

毎月一回　十二月號要目　一日發行

臺灣の事情を知るに唯一の雜誌也

外國の通俗教育　石川博士
アメリカの子供　小此木まつ子
クリスマスの話　小柴教諭
婦人の覺悟　有馬教授
冬來る　伊藤左千夫
歌留多の話　一撰手
秋より冬　與謝野晶子
短歌抄　左千夫
其他、南國雜記、園藝、料理、斯界記事等

口繪　晩歸　石川欽一郎氏筆原色版
其他彩色石版　アートタイプ數十葉

小說
宮子　與謝野晶子
女教師　加納幽閑子
漂浪　太田鳴鳳
貴族の子　中川蝶夢

紙數三百餘頁定價拾五錢　郵稅不要

臺灣總督府構內
愛國婦人會臺灣支部發行

賣捌所
東京　神田區表神保町　東京堂
東京　京橋區銀座三丁目　東海堂

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

女子文壇

十二月號要目　一日發行

定價金拾五錢　送料壹錢五厘

● 與へられたる婦人……文學博士 福來友吉
● 意味無き反抗心……山脇高女校長 山脇房子
▲ 峠より、麓より……橫瀬夜雨
▲ 夜の女……中村吉藏　吉井勇　兒玉花外　三津木春影　川路柳虹
● 新しき女優の覺悟……松井すま子
● 女記者の地位……澤田撫松
▲ 冬の夜語……坂東太郎
▲ 名流婦人の愛讀書（二）……長谷川時雨女
▲ 裾野日記……佐野天聲
▲ 盲人郷……しづか
▲ 邂逅（小說）……小笠原貞
▲ 山より山……平塚白百合

一月元旦號豫告

新年特別號

紙數例號二倍。定價參拾錢　送料貳錢五厘

創作は第一流の作家の作、**談話**は當代の識者の說、**思想**の方面に於ては**婦人雜誌**中、最も進歩せる**本誌の態度**は、新年號に於て殊に其の**全盛**を**極**めんとす

◀（振替口座東京第壹七貳九番）　**女子文壇社出版**　東京市京橋大鋸町 ▶

スバル

十二月一日發行

價卅五錢 郵税二錢

十二月號

雁（小説） 鷗外
じ君の話（小説） 松本泰
ゲスタス（小説） 山本禿坪譯
十一月（小説） 長沼重隆譯
澪（小説） 長田幹彦
ゾラの手法について 大貫雪之助譯
むく鳥通信 無名氏
——詩——
高村光太郎
佐々木好母
佐藤春夫
堀口大學
——歌——
吉井勇
萬造寺齊
三ヶ島葭子
和貝彦太
——裏畫——
長島豊太郎

東京神田北神保町二 昴發行所 電話本局四二六四番

北原白秋氏著
象徴詩集 邪宗門 再版
定價金八十五錢

文藝雑誌
朱欒（ザムボア）
十二月號

北原白秋氏主幹

定價一冊二十五錢

小山内薫氏著
演劇新聲 新刊
定價金八十錢

若山牧水氏著
歌集 別離 三版
定價金七十錢

北原白秋氏著
抒情小曲集 思ひ出 四版印刷中
定價金九十錢

東京市京橋區
南傳馬町三
東雲堂
振替五六一四

最良髮油

みやけ油

登録商標

東京人形町通

木村三宅堂

家庭重寶

專賣特許一一二九八

粉末石鹼

發賣元

東京市日本橋區人形町通

木村三宅堂

電話浪花六二〇振替口座八七五一番

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

六巻 **四千頁** 學界と文壇を通じて稀有の **大著**

藤井紫影 笹川臨風
佐々醒雪 沼波瓊音 著

見本を要せば郵券貳錢封入申込る可し！

新釋源氏物語

第一巻

●挿畫五十四面 コロタイプ版 梶田半古畫

●體裁 總クロース布製金模様 二面金 箱入 ——無比の美本

●定價（第一巻） 金貳圓參拾錢 小包料拾貳錢

特價 四千部を限り 壹圓八拾錢 小包料拾貳錢

●初版賣切

再版出來

●好評嘖々

東京麴町飯田町三丁目廿五番地 新潮社 電話番町二二一三番 振替東京一七四二二番

入會の最好機

女子手藝講義録

普通科

本會の講義録は現代婦女界に廣大の信用あり
本會の講師は東都に於ける有名なる各學校の教師と都下に於て著名の各專門家とに依り成立せるものなり

講義

△裁縫科和服洋服
△手藝用圖畫科
△割烹科和洋
△手藝教授法
△組糸科
△袋物科

△編物科
△刺繍科
△造花科
△果實科
△細工物

△摘細工

會費（普通科）

壹ヶ月分……金參拾錢
半ヶ年分（割引）金壹圓七拾錢
壹ヶ年分（割引）金參圓廿四錢

高等科

課目

△裁縫科和服洋服
△手藝用圖畫科
△割烹科和洋
△手藝教授法
△組糸科
△袋物科
△絓繡科

△編物科
△刺繍科
△造花科
△果實科
△摘工科

△課外講義數種

會費（高等科）

壹ヶ月分……金參拾五錢
半ヶ年分（割引）金壹圓九拾九錢
壹ヶ年分（割引）金參圓七拾八錢

成功の捷徑は即刻入會するにあり

▲入會規定及內容見本申込あれ無料進呈▼

入會申込所

東京日本橋角

大倉書店

振替貯金口座東京二三八番

入會小 込文部 全國各書店

毎月一回 一日發行

學科 壹ヶ年修了

雜誌規定

○毎月一回一日發行
○定價一册金貳拾五錢　郵稅壹錢五厘
○原稿〆切期日は毎月十日限とす。
○前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢
八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
○廣告料　（一頁）拾五圓　（半頁）八圓
○廣告は總て卷尾のこと、但し申込の順序に依る。
○振替貯金（東京口座一一六〇）に拂込まれたし
○郵券代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）

明治四十四年十一月二十五日印刷
明治四十四年十二月　一日發行

東京市本郷區駒込林町九番地
青鞜社內
編輯兼發行人　中野初

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

禁轉載

發行所　東京本郷區駒込林町九番地　青鞜社
（電話下谷三七七六
振替東京口座一一六〇番）

發賣所　東京市神田區表神保町三番地　東京堂
電話本局二一二四
三三八

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

53 126CO XL 405 04/09 30016-162 UA HFGroup

University of Colorado at Boulder

U18304 6746123

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

青鞜第一巻第三號
明治四十四年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
明治四十四年八月廿八日第三種郵便物認可

ASN
PL
756
W6 S45
v.1
1911

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER